

解らん。第三には、海に溺れた其人が、呼聲聞いてア、助け船が来てくれた、ヤレ嬉しやなど、思ふてをることの出来るものならば、海の面に平然と浮てをる人のすること。其様の人ならば、助け船は行かずとも、或場合には何處かへ泳ぎつくことの出来る人に違ひない。眞實水中に苦み悶へてゐる人には、呼聲などの聞こえるものでもなし。よし聞こえたところで、歡喜の安心のといふやうな思想の起るべき道理はない。ソモ呼聲は何の爲かといふ、大いなる不審は皆様に起りませぬか。皆様は海の上へ座布團でも敷て踞りてゐて、向ふから来る助け船の呼聲

を聞きひて御座るといふやうな。平氣の聽聞をしてゐて下されては、眞實の極致はしれませんぞ。

拙者は明治二十九年の夏京都にゐて、亡學師智治心寂君と、暑中休暇を利用して、十三歳になる宿の息子を引連れて。三河國宮崎といふ濱へ、海水浴に行つたことがある。太平洋は日本海と違ふて、潮の差引が非常に多い。干潮の時に一丈餘りも出てゐる岩が、満潮の時には皆没れてしまふ。其満潮のさかりに、海に入らうとしたところが、十三の息子も入らうといふので。此息子泳ぎを知らぬゆゑ、甚だ危険と思ひ。拙者は岸の岩の程よき

所を調べ、サアお前はこゝにをるのぢや、此處から離れると死んでしまふぞといひ聞かせ。拙者は智治君と五十間計りの沖にある岩を見かけて泳いで行つた。偕其岩に到着して振返つて見たところ、アラ大變よ息子が岩をふみはづし、没つたり出たり苦しんでゐる。其時拙者は阿彌陀如來の真似をして、西岸上に立上り。我を一心に頼め、必ず助けろぞ、と呼ばはりてなごゐたものならば、息子は忽ち死んでしまふのぢや。此場合に於て、呼ぶと聞かせるもあるべきや。夢中になりて。智治君と共に泳いで來て、其息子を助けてやつた事がある。

さあ皆様、此事實に照して、此御和讃を味はふて見て下され。阿彌陀如來は大急ぎに我等を船の中へ救ひ上げて下さらずして、何故に呼んで御座るのでせう。暢氣の話しにも程がある。爰で或人の話しには、御助けを知らせる爲に呼んで下さるのぢやといふ。夫ではいよくをかしい、溺れた人に御助けの意味を知らせねば助けられぬといふ譯はあるまい。溺れた人は半死半生で、御助けの意味は知らずとも、船に救ひ上げてしまへば、目的は達せらるゝのぢや。是は前にも申したことで、河に流れて溺れて沈む其人を救ふ船から呼掛けて。其溺れた人の受け心や、

安堵の出来不を見てから助けるといふ船ならば。助け船とは申されぬ。夫こそは殺し船といふものぢやと。茲まで話しを進めて見れば、阿彌陀如來が有情を呼ばふてのせ給ふといふが實に解らん話してである。

二七 呼聲と船

皆様よ、この有情を呼ばふてのせ給ふといふところが實に三世十方に並びのない、超世不共の彌陀法に局る別徳を顯はして下さるゝのであります。多くの人は、爰に不思議のあることを

知らずして、たゞ世間普通の助け船から呼掛けたものゝやうに心得てをるものゆゑに。彌陀の呼聲の價値が更に解らんのみならず、呼聲丈は全く要ぬものになりて来る。此世の助け船ならば、呼ぶも聞かせるもいりません。たとひ呼んで聞かせて喜ばせても、船が行かねば乗せることも、助けることも出来ぬのぢや、然るに阿彌陀如來に限りては、此呼聲が何より大切なので、呼んで聞かせる外に助ける道はないのである。

抑も阿彌陀如來の弘誓の船といふものは、木で造りたものか、鐵で造りたものか、皆様は御存知でありますか。船がおわかり

ないことでは、乗せて戴くことも出来ませんから、よく御聞き下されませ。弘誓の船は木で造りたものでなく、鐵で造りたものでもない、何で造つたものかといへば、五劫の願と永劫の行で出来上りたが弘誓の船。速力は屈伸臂頃で、噸數は願力無窮形ちと申さば、長くもなく、短くもなく、色も相もあらばこそ、唯南無阿彌陀佛の呼聲一つ。此六字の呼聲が、弘誓の船として見ると、實に佛法不思議といふことは、彌陀の弘誓に名けたり。何が不思議と申しても、弘誓の船ほど不思議のものはありません。船が六字で六字が呼聲なら、呼聲の外に、乗せて下さる船はないの

ちやから。呼ばふて下さる呼聲が、乗せて下さる船を差付て下さるゝ事になるそこでいよく、今の御和讃が明瞭に解ります。彌陀觀音大勢至の御助けの人も、大願の船といふ御助けの法も。我等生死の凡夫の手元へ届けて下さるゝ其時は、悉く名號六字の呼聲にして、呼んで聞かせて與へて乗せて。助けて救ふて參らせて下さるゝ御手柄を顯はして、『有情を呼ばふて乗せ給ふ』と仰せられたのちや。此味はひを先年某同行に書送りた拙者の腰折れがある。

『呼聲のまゝが攝取の助け船聞く一念が乗込んだとき』

六字が船で、船が不思議や、呼聲なら。耳に六字の聞えたとき、耳まで船が着いたとき。心に仰せが真受になりた一念に、乗込む世話もあらばこそ。大願の船に乘せられて、正定不退の身となるのちやで。機受の手前は造作なく、次の和讃にあらはして。「彌陀大悲の誓願を深く信せんひとはみな」と聞信の一念に、乗込む用事は濟んで仕まい、後は御恩の内住居。「ねてもさめてもへだてなく、南無阿彌陀佛を稱ふべし」と二首一連に御示し下された次第である。さて其乗込む一念、乘せられた信相は、次第に於て委しく御話し申しませう。

二八 弘誓の船と港

前席より引續いて御話し申します、我等が此度び難度海を渡して戴く、弘誓の船の本體は。招喚大悲の呼聲にして、有情を呼ばふて乗せたまふ、其呼聲が弘誓の船として見れば。此弘誓の船の着場は何處かと尋ねれば。横濱でなし神戸でない、船の着き場は知れたこと。彼方方の頭の兩脇に付いてある、椎茸の破片たやうな。其耳が、弘誓の船の港である。あゝ皆様は結構な港を御持参ですな。高座の上から眺めて見ると、大きな港も

あれば小さい港もある。杓んだ港も平たい港も有るわい〜
種々ある。アラ彼邊には随分垢だらけの港も見へる、ア、穢な
……そんな垢着た穢ない港では、逆も弘誓の船は着きそうもな
い。「何を仰しやる私共の耳は、毎晩風呂で石鹼を仕用ふて洗
ふてゐますよ」。オイ〜御同行衆、その石鹼でおちる垢をいふ
のでないよ、五年も十年も御座へ参りて聞いてはゐても。今日
まで弘誓の船に乗れなんだのは。皆様の耳の中に、自力疑心と
いふ計らひの垢で、穴を塞いでしまふてありたゆゑ、弘誓の船が
入港が出来なんだのぢや。出来ぬもそのはず、届いた六字を脇

へぬけ、確かになりて明るうなりて、丈夫の思ひになりたいのど。
自力意業の垢で固めた耳ぢやもの、そんな耳では仕方がない。
サア今日は浚渫工事といふて、自力の垢を浚ひ出し。どうもな
られん此儘で、乗せて渡して下さるゝ船が六字でありたかど。
彌陀大悲の誓願を深く信する一念に。貪瞋煩惱の腹底へ、届い
た六字の御呼聲。乗込む世話や造作なく、助けにやおかんと抱
きしめられ、救はにやおかんと乗上られ。寝るも起きるも大悲
攝取の船の中、煩惱の波は高くとも、妄念の風はつよくとも。届
いた六字の船は動かす頼みになるも、是一つ力にするも爰の味。

絶るも任せるも、安堵も決定も、往生一定御助け治定平生業成不
來迎淨土真宗の信心安心の有丈は切符のやうな品ではない、御
助けの船に乗込む一念に。思案も工夫もいらばこそ、乗せた六
字の力用で。一時に具足る信相なるが故に、一流安心の體は凡
夫自力の意業でないぞ。南無阿彌陀佛の六字の相としるべし
と、御示し下された御文である。

二九 断りが遅いと佛になるぞ

拙者の檀中に、越後の貞信といへば、真宗の信仰界に、誰れ知ら

ぬものはない、妙好人がありました。惜哉明治四十四年の三月
七日、八十三歳を一期として、目出度く往生をまげました。此貞
信が存命中に、不言不語の間に、絶對他力の真味を我々に知らせ
てくれた恩は、實に少くはありません。而も貞信の胸中には、自
分が信者らしう他人に思はれては、大變ぢやといふ考へを、常に
守り本尊の如く仕てゐた尼でありましたから。いつも他人の
美譚を持出して、話しの止が、逆も私共の真似でも出来ぬ難有い
御方でありました、と謙退りてをる外に。自身の喜んでをる事
や、聞き覺えたことなどは、頸切られても物語らん性質でありま

したが。或時ごうした機か拙者に向ひ、生涯にたんだ一座覺え
こんだ説教があります。夫が非常に短い御説教でありますか
ら、貞信の様な物覺えの悪いものまで、忘れずにをりますと話し
出し。五乗院様が講師職におなりなされた時の逸話を物語り
たことがある。其話しの中に頼む歸命の一念には、逆も自力意
業の、よりつかれぬ味はひがありますから。今六字の船に乗込
む一念を助成するに付いて、其話を請賣して見ませうが。皆様
も暫く耳を貸して下さい。

今日でこそ御講師が五人も六人も揃ふて御座るが。昔は御

講師といへば、日本中に御一人さへなかつた時代が多かつたの
で。其頃は講師職におなりなされた御方は、是非共京都にゐて、
善知識の御化導の御補佐を申上げねばならぬので。五乗院様
も、いよ／＼講師におなりなされて見れば、もう江戸にをること
はならぬ。是より京都へ上つて、學問と討死すると仰せらるゝ
ので。永々御育てを蒙りた江戸の同行が名残を惜み。何卒御
出立の朝は、御別れの御座を開いて下されと御願ひした。五乗
院様も、快く御承諾遊ばされ、偕其當日の朝となりたれば。江
戸中の御同行、今日こそは御講師の御説教、此世での聞きおさめ

と未明中に御堂一杯つめかけて、今か〜と御出ましを待つて
 ゐた。そこで四つ時分になりて漸く高座へ御登りなされ其時
 の説教が驚くほど短いので。真信の忘れんでをるといふ説教
 が是でありますから、皆様も心静かに聞いて下さい。先づ初め
 が『皆々早朝より参られて奇特のことである』。是は御挨拶の
 御言葉で、其次は、『時に檀上に御立掛りの親様はなあ、御前たち
 の罪の持合せの身代ありだけ引受けて、助けるそと仰しやるか
 ら、難有ふ心得て御念佛致されよ。法座は先づ是にて存略』と
 早や御説教がすんで仕まふたソシテ高座より下り際に、『併し

罪の身代減らして行つてはすまんぞよ』といひ残して、早速御
 立なされて仕まふた。参詣の同行は、今讃題でも演べて御座る
 のであらうと思ふてをるのに。忽ち高座から御下りなされた
 ものぢやから、大いに驚き。御講師様は、どうなされた、御加減で
 も御悪いのか、どうぢや〜と騒ぎ立てた。そこで高座のもと
 に参つてゐた耳の堅い同行が、一同を鎮め、最う御説教は御済み
 になつたのぢや、と知らせたところ。一同はあきれ返り、早や済
 んだとは何事である、こんな短い説教があるものか、と思痴をこ
 ぼすので。前の同行は一同に向ひ、長い御話しでさへあれば、皆

様は難有いと思ふて御座るか。只今御講師様の御話しは、誠に短いことではあるが、至極難有いことでありましたといへば。一同は其様の御説教を我々は聞き損じ、残念のことを致しました。何卒御話しの大要を知らせて下されど。一同は前の同行より是れ／＼の御示しであつたと聞かせられ、去れば我々も難有く戴かれますといふやうな始末。餘り短い御説教で、肝腎の善知識は、御座敷で法衣を脱いで御座る頃になりて、漸く末座の同行が、難有くなつて来た、といふ様な可笑しい話し。

然るところ爰に一部の同行が、三々五々と集つて。只今の御

教化は如何にも不審に堪へないといひ出した、其譯は阿彌陀如来が、罪の有丈け引受けて助けて下さるゝ位の事は、いかなるものも知りてをる。抑も當流は頼む一念のところ肝要でないか。只今のやうな御話しでは、大事の頼む一念の立場が更にわからん、皆様腹がふくれましたか、逆も腹はふくれませんか、と仲々六ヶ敷い議論が出て来た。五乗院様は素より其様の話しは一向御存知なく、御急になる御道中のこと故に、早や御籠に召て御出立になりた。其頃は御講師には大名の格式で、道中を許されてありたものゆゑに。槍まで立て、下に／＼と御伴勢やら御見送り

やら、仲々の混雑であつた。御堂に居残る同行は、御膳は引けても、腹はふくれぬといふ風情。一念の立場は逆もわからん。そこに一人の男がありて、是は爰で議論してをる場合ではあるまい。最早や善知識は御出立、今日聞かねば無量永劫の損をする、無言のまゝに立上り、跣足になりて御籠のあとを追ひかけた。皆様よ、是が如實の同行と申すもの。御座へ参りて聞き乍ら、合點のゆかぬ事柄を、蔭でよしあし並べたて、進んで聞く氣のないものを、邪見我慢と申します。兎角此種の同行が、世間に多いものぢやのに。今の男は一心不乱に走り出し、一里計りの

ところで大勢の仲をおしわけて、御籠に縋りて、暫くくと御願ひした。そこで五乗院様手づから御籠の戸を開き、『何んぞ不審がありて来たかや』の仰せ、今の男は大道中に下座をして、『誠に御道中の御邪魔申して濟まざるわけでありますが、何分今朝程の御教化。心をいれて聴聞をして見ましたが、どうしても頼む一念の立場が解りませんので、爰迄御尋ねに参りました。其時五乗院様御籠の中よりの御示し。サア皆様よ、昔話と餘所事のやうに聞いて御座りては、御徳がとれませんぞ。我身が今大道中に下座をしてゐる心になりて、耳を傾けて下され、其時の

御諭しに。『よう尋ねて來られたのう、御前達は、漆でつけたやうに、しつかりとして參るつもりであるけれど。夫はどうもならぬので。此ぐらくした心中のまゝで、引受て助けるぞと仰しやるのぢやが。こう聞いたら、左程いやでもあるまいが。いやなら早く斷りをいひやれや。斷りが遅いと佛になるぞ』との仰せ、今の男は驚いて。『ハア〜』と感じいらたる相を御覽なされて、五乘院様。『親父それが早や歡喜の相ぢやよ』と仰せられた、今の男はまだ腹におちかねて。『そんなら一念の立場は何處に』といはせも果てず、五乘院様。『何を愚圖〜いふてを

る、一念の立場は、お前が今ハア〜といはぬ先に、濟んであることぢやわい』と御諭しなされたので、今の男は大道にひれふして、今日迄の心得違ひを謝りはて。『されば届いた仰せ、たつた一つが頼まれた一念でありましたか』と大いに感涙にむせんで御別れをしたといふ御話である。

・ 三〇 乗せられた信相

サア皆様よ、此五乘院様の御話しがわかりますか。實に奇抜と申さうか、深刻といはふか、他力教の不思議〜と信せらるゝ

一念の極致をいひ盡してある御諭しであります。拙者から初め、漆で付たやうな、堅い信仰を此機の上に求めて。今度こそは是で決定、今日こそは是で往生と、極めて見るから動き出す。動き出すから又極める、極めては動き動いては極め。此ぐらくとした心中を、自分の相手にしてをる間が定散自力のはからひである。然るに此ぐらくとした心中を、如来様の相手にして見れば、此心中を此儘で助けるぞよが彌陀の呼聲。『こう聞いたら左程いやでもあるまいが』。いやなごころか、斯るものをも御助けと、眞受になりたら大騒動。落る我身に落さぬ御手が届か

せられ。逃る此身の力より、逃がさぬ願力が強過ぎて。逃も隠れも出来ぬ身になる、不思議の法が彌陀の六字の呼聲ゆゑ。『いやなら早く断りをいやれ、断りが遅いと佛になるぞ』。何んぞ奇抜の御諭しではあるまいか。断りが遅くなると何うして佛になるでせう、皆様こゝらの味はひが吞込めますか。只の六字や只の呼聲なら、聞いても信じても届いても、凡夫が佛になるやうな、敢て騒ぎもあるまいが。彌陀の呼聲に局りては、名體不離の不思議の御手柄があればこそ。佛が聲で聲が佛。呼聲のまゝが攝取の助け、耳に聞えて心にしれて。いやではないと信せら

れ、虚ではないと眞受になりた一念に。弘誓の船なら乗せられた、親様ならば抱き上られて仕まふたのちや。ほんとにいやなら、急いで断りいふがよい、断りおくれて仕まふたら。鬼のまんに正定聚佛の仲間にさせて戴く一念は。こちらで起す一念でない、法の届いた一念が頼む一念の信相と顯はれて下さるゝので。やれ嬉しやは、早や後念嬉しなくても往生に、仕損じ出来るわけではないが。仕損じ出来ぬ往生と、定まりた信のはたらくまで、歡喜の味が流れいで口にこぼるゝ念佛の、報謝の行の末迄が、他力廻向の賜である。

そこで當流の能機の信相といふは、乗りた御客の心で立る信相でない。乗せた六字の船の力用が、乗りた御客の此機の上に、寫り顯はるゝ形を信相と申すので。往生一定も船の力用、御助治定も船の力用。頼むも絶るも任せるも、自力の捨たるも世話のいらぬも、安塔の出来たも疑ひ晴れたも。乗りたこちらの心できめる信相でない、乗せた六字の船の力用で。思ふ思はぬの世話いらす、一時に具足る信相である。此故に乘せた大事の弘誓の船が、萬一沈没して仕まふたら、夫と同時に信相も、忽ち消滅して仕まふので、往生一定も御助け治定も、あつた始末であらば

こそ。頼むもすがるも消失て元の生死の凡夫である。此世の船なら沈没をする恐れもあるが心に届いた六字の船は。願力無窮の船ちやゆる、波風いかに強くとも沈みも失もなさらずに。動不動心と動かぬ六字の力用があればこそ、動きどほしの此機の上に、動かぬ信相と顯れて、正定不退の身となるのちや。爰五帖目十三通を讀んで御覽。『されば信心をとるといふも、此六字のうちにもれりとしるべし、更に別に信心とて六字のほかにあるべからざるものなり』。又次に。『此故に南無阿彌陀佛の六字の相は、我等が極樂に往生すべき相を顯はせるなりと、いよ

くしられたるものなり。されば安心といふも、信心といふも、此名號の六字の心をよくく心得るものを、他力の大信心を得たる人とは名けたり』。と仰せられてあれば、信相はたしかに六字の船の力用といふことは、明瞭に御得心が出来ましたでせう。そこで其船に乗込んだ機相をいへば、千差萬別となりて來る。其事は次席に御話し致しませう。

三一 乗込んだ機相

御話しを中途にして餘り永く休憩を致しまして、皆様方に御

退屈をさせ申し、誠に御氣の毒のことを致しました。定めて御待ち遠いことで御座いましたでせう。併し御互は阿彌陀如来様には、何程御待たせ申したかと思ふて見れば、實に勿體ないことであります。法然上人が或時阿彌陀經を御讀みなされて、御經の中程に、雨さめくと泣いて御座られたことがある。其時御弟子方が怪しみて、何故の御なげきでありますかと御尋ね申上たれば、法然上人の御答へには、外の譯ではなけれども、今此御經の中に、阿彌陀佛成佛より以來、今に十劫なりと説かれてある。世間の諺にもある如く、待たるゝ身になるとも、待つ身

になるなどいふではないか。待つは憂いものつらいもの、我れ衆生を待つこと心にひまなしと。一劫ならず二劫ならず、十劫といふ長の間だ。大悲の親様につらい思ひで待たせ申したは、此法然であるかと思へば、申譯ないやら勿體ないやら、計らすも涙が止めかねるよと仰せられたことがある。さあ皆様方御互の我々も、是迄御待たせ申したは仕方はないが、此度限り他力信心を決定して、誰は兎もあれ角もあれ。我身獨りは爰で迷ひの打止として、淨土往生の素懷をとげ。大悲の親様の御胸を御休め申さねば、濟まぬことぞと心得て。聽聞に心をいれて戴き

たい。

そこで上來の御話しに、當流の信心安心は、船に乗る時の切符のやうなものでなく。乗彼願力之道と、大願業力の弘誓の船に、乗込んだ一念が、信心決定の相にして。而も雜行を捨て、彌陀を頼むといふ信相は、乗りた御客の心から出す信相ではない。乗せた六字の船の力用が、此機の上に顯はるゝ形を、信相と申すのちやといふことは、委しく御話し致しましたが。船の力用から申せばこそ、十人は十人ながら、百人は百人ながら。往生一定御助け治定平生業成の信相は、更に變りはないと申さるゝもの

。若乗込んだ客の機相からいふて見れば、千差萬別種々各々で、仲々同一にはゆけません。先づ大體に於て、船に強い人と弱い人では、其機相に於て格段の相違のあるもので。拙者の如きは、随分海船には強い方で、毎年のやうに北海の荒海をこえて佐渡へ往復して見ましたが、風がよければ甲板の上で、海上の風光を眺め、風が悪くば室内で新聞でも見るか。時刻が来れば辨當でもつかふ、夜分ならば給仕相手にビールでも飲んでやるといふやうな次第で、可なり樂みに航海も出来ますが。さあ船に弱い御客になると、風がよくとも飲食などの出来るものではない。

頭りはやめる胸はむかつく、少し波でも高くなつて來ると。忽ち金盃を相手にして、さても苦しい聲たて、イロイロくくといふてをる、困りた御客も澤山ある、御婦人には別て此種の苦しみが多いやうだ。併し乗りた御客の心地で走る船ではない、走るは船の力用ぢやから。樂み／＼乗行人も、苦み苦み寝てをる客も、近づく港は同じこと。サア此世の船には可なりに強い拙者も、未來の船には耻かしいほど弱いので。祖師聖人や蓮如様、法力坊や道西坊。さても弘誓の船には強い御方方。一度び乗彼願力と、弘誓の船に御乗込なされた一念より。波風あらし

御難儀に、何程御逢ひなされても、御恩々々と喜びて、念佛諸共此世を送りなされてある。然るに同じ弘誓の御助けの船に乗せられてある此身の上は。三毒五欲の頭痛はする、煩惱妄念の胸はむかつく、八萬四千の吐瀉し。よつてもつけぬ淺間敷い日暮しは、我身ながらも愛想のつきた此機である。此機で參る淨土なら、こんな機様をかへたやつが、祖師や蓮師の御後を慕ひ。行かるゝ譯はなけれども、乗せた弘誓の願力で、送り届けて下さるゝ。他力づくめであればこそ、忘れ通しの此儘で、喜び通しの御方と。同じ淨土へ船入が、出来るは、どうした不思議ぞと、存せ

られたであらうなら。あとへ残るは慚愧々々、唯申譯のない此身ぞと。あやまり果てゝは御念佛懈怠の心に鞭をあて。息の通ひのある間は南無阿彌陀佛〜。

三二 此世へ出るには

御話しの糸口を改めて是より皆様に浄土真宗の極樂参りの筋道を、大體の形の上より御話しをして見たいと思ひます。信心の安心の、一念の後念の、自力の疑ひのと申せば、仲々六ヶ敷ことのやうに思ふて御座るのは。兎角文字や言葉に拘泥して、大

體の筋道が御飲込になりてないもの故に、心得安い信心が、心得難い心配となりて來るので御座います。當流の御教化は何も六ヶ敷ことはないので、大體の目的からいふて見れば。浄土へ生れて佛になるといふ問題は、大きい筋道は明瞭なので。其浄土へ生れて佛になるには、何うすればよいかといふのが今日の御話しである。

夫に付て論語といふ書物の中に、『未だ生を知らず焉んぞ死を知らん』といふてある。是は子路といふ孔子の御弟子が、或時『敢て死を問ふ』と、先生吾々は死んだら、どうなるものでありま

すかと尋ねられた。其時孔子の答へられたのが今の言葉で、其意を味はふて見ると。死んだらどうなるものかとは、餘りに行過た尋ねである。未だ生を知らず汝は未だ生れて來た譯さへ解つてないものが、焉んぞ死を知らん何として死んで向ふのことが解るものか。死んでの向ふが知りたくば、先づ生れて來たことから究めて見るといふころ。成程御尤もの話しであります。皆様も淨土へ生れて佛になるは、死後の問題で解らん話しとして見れば。解らん話しは、解る方から考へて見よ。淨土へこそは生れたことはなけれども、人間に生れたことだけは請

合の御互なれば。淨土參りの話しはあとにして、先づ人間に生れたことから考へて見て下さい。御互はどうして人間に生れたのでせう、是は前世に五戒を持てる功力に依つて、生れたのぢやといふ評判であるけれど。五戒を持つたか御粥を喰たか、夫は我等の解らぬことゆゑに、先づ解つた部分だけで味はふて見ると。上は王侯紳士より、下は田夫野人に至るまで、此世へ生れるに付ては、必要缺くべからざるものは親である。親の腹を借りねば誰でも此世へ出ることは叶はぬ。今日御集まりの皆様方も、残らず親から生で貰ふたので、木の股から出た人などは、

一人もあらう筈はない。借其親の腹を借りて此世へ出るとしても、其親の善かつたと悪かつたでは、生れた上に於て大いなる違ひがある。金満家の親から生で貰ふた兒供は仕合せで、生れた其日から不足なく。絹や小袖に纏はれて、乳母や女中に傳づかれ、蝶よ花よと育てらるゝも、親取の善かつた爲である。夫に引替、若も乞食、非人の腹でも借りて、生れた兒供は氣の毒や。生れ出ては見たものゝ家も着物もあらばこそ、是も親取の悪かつた御蔭である。併し御互の我々は、貧富貴賤の隔てはありても、先づ人間といふ親の腹を借りて出たから、勞せず難儀せず我身

も人間といふものになられたが。一步轉じて考へて見ると、同じ此世へ出るにしても、馬や牛の腹を借りて出たら、今頃は何といふものに成てをるのでせう。夫は解りきつた事で、馬の腹からは馬、牛の腹からは牛、猫も鼠も鳥も虱も、必ず親と同じものが生れるといふが、天地間の定りであるから。何處へ行つても鼠が馬を生だの、牛から鳥が生れたの、といふことは決してないことである。そこで御互は喜ばねばならぬ、同じ此世へ出たにもせよ、馬や牛であつたなら、生涯人におひつかはれ。難儀の果ては打殺され、皮は剥がるゝ肉に喰はれる、イヤハヤたまつたもの

でなかつたに。萬物の靈長たる人間といふものゝ腹を借りて
 出た御蔭に、五十年無事に送らせて戴くのみか。犬や猫なら聞
 くこと出来ぬ、後生の一大事を聞かせて貰ひ。鳥や翅では戴く
 ことのならぬ、他力本願を戴くことの出来るのも。偏に人間と
 いふものに、生れさせて貰ふたればこそ。爰を源信和尚は。『夫
 一切衆生三惡道をのがれて、人間に生るゝこと大いなる悦びな
 り、身は賤しくとも畜生に劣らんや、家は貧しくとも餓鬼には勝
 るべし、思ふこと叶はずとも地獄の苦しみに比ぶべからず、世の
 住憂きは厭ふたよりなり、人數ならぬ身のいやしきは菩提を忻

ふしるべなり、此故に人間に生るゝことを悦ぶべし。』と仰せら
 れた次第である。

三三 佛けになるには

併し皆様方此度折角人間に生れたは結構なれど、永くはをら
 るゝ身ではない、無常の風の來次第に出掛ねばならぬ此身であ
 る。其出掛るといふは、身體が出掛るのではない、心一つが出掛
 るのぢや。身體は此世の置土産、残して行けば子や孫が、必ず始
 末をしてくれる。可愛や出掛る此の心、親でも子でも兄弟でも、

三三 佛けになるには

誰も始末のしてがない。依つて蓮如上人は、後生は一人の心の
 しのぎちやぞと御誠め下された。サア皆様一分の心の行
 先き何處へ仕末を御付けなさる。死ぬる仕度をするのでない、
 生れる仕度が後生です。犬になるか猫になるか、畜生道は如何
 で御座る。夫は眞平御免であらう。然らば、もう一度人間に生れ
 るか、是も聊か考へもの。四苦や八苦にせめられて有は無はの
 足搔をして、度々のつまりは死なねばならぬ人間へ、何度生れて
 来たとても、末の望みはとげられぬ。どうせ生れる位なら、一度
 生れた其上は、二度と死なない御淨土で、佛になりて仕まふのが、

上分別であるぞよと御勸め下さるが當流の一筋道。然れば其
 淨土へ生れて佛になるには如何といふに。何處へ生れるも同
 じこと、犬になりたくば犬の腹、猫になりたくば猫の腹、佛になり
 たくば佛の腹へ。ちやんと心を宿して仕まへば、面倒なしに佛
 になれるはしれたこと。偕其佛は、十方三世に數あれど、智者や
 聖者ならいざしらず、悪人凡夫に腹貸す佛は更にない。然るに
 大悲の親様阿彌陀如來一佛は、此悪人に腹貸すぞよ、此女人をば
 攝めるぞと、十劫以來の御呼詰である故に。斯るものを御助け
 は、尊方御一佛でありたかど、大悲の親の懷ろへ落る機様の此儘

で宿つてしまふた一念を。光明攝取の御利益にあづかつたといひ、此攝取の光明に逢ひ奉りた時を信心決定とも、往生一定とも、平生業成とも申すのである。是を祖師聖人は、『心を弘誓の佛地に樹て、情を難思の法海に流す』と御喜びなされてある。御言葉は堅いが、仕事は別にあるのでない。落る此身が落さぬ親の懐ろ住ひになりた計りで、往生に仕損じはないのぢや。其親様の懐ろへはいるに付て、鎮西では臨終にはいることにしてあるが。其臨終は仲々混雑で、捨て行く此世が名残惜いやら、出掛る未來がさびしいやら。殊に死ぬ縁無量と當にならな

い臨終に、若も仕損じては無量永劫取返しがつかぬゆゑ。臨終までは延ばしておかず、無事や達者でをるうちに。早く光明の懐ろ住ひになつておけよが、當流の平生業成の教へである。諸皆様爰迄聞いて下されたら、今日は一人も残らず阿彌陀如来の懐ろへ入つて御歸りを願ひたいが如何ですか。『ハイ私丈は御免を蒙ります、其様な懐ろなご入つては、若も窮屈など困りますから』。コレ、其御心配には及び申さず、窮屈などはあらばこそ。商ひするにも邪魔にはならず、獵すなごりの邪魔にもならず。夫婦交はる其中も、孫子育てる其時も、邪魔にならぬ計

りでない。此世の難儀の節々には、抱いて下された親様から、御手傳して戴いて、樂に日送り出來るゆる。強て御勸め致します、早く如來様の懷ろへ御入りなされ。『然れば如何して這入ば宜しいか』。爰が肝要の聞きどころ、如何してはいればよからうと、入る工面を聞きにかゝるが自力の分際。子供の方から抱かれやうには自力がいる、親の方から抱いて戴く赤子の身なら、他力づくめ。殊に我等の身の上は、落るや沈むに油断はないが。淨土參りと出掛ては、赤子に劣る腰拔もの、抱かれる力はなければ。抱いて戴く此身より、抱いて下さる親様は、心矢竹に思召し。

如何したならば彼衆生、思ひのまゝに此彌陀が、抱いて助けて淨土まで、引寄せることが出來やうかど。五劫永劫思案に修行、諸佛超世の御手柄で、四智三身の御内證、光明相好の御相まで。聞ゆる六字に身をやつし、呼んで聞かせて下さるゝ、名號六字の御助けが、名なり體なり親様かど。信せられたる一念に、佛心凡心一體と、抱きつ抱れつゝ抱きつ。抱れた此身は動いても、抱いた六字に動はないで。安堵の體も此六字決定の體も、此六字、六字一つのはたらきで、三界六道あとに見て。やがて淨土の御證は、間違ひないぞと知らせて下された御文ゆる。我等一切衆生

の往生の體は、南無阿彌陀佛と聞こえたりと御意あらせられた次第である。

三四 綱にすぎる譬

『朝霧や呼べばこなたに渡守り』朝霧に立置られて一寸先の見へぬ渡船塙。船頭は定めて向ふの岸にをるであらうと、大聲上てオーイと呼んで見ると。豈計らんや此方の足元よりオーイ船は出ますぞと應へてくれたので。ア、遠い處を尋ねるでなかつた、近い處にあつたことよ、といふ味はひを讀んだが只今

の一句である。サア皆様よ、此度後生の一大事も、不了佛智の霧深く、方角解らぬ御互ひのならひとはいひ乍ら。心得易い安心を、今日が今日までうろたへまはり。ごう頼んだら助かるであらう、ごう思ふたら參れるであらうと。行きつ戻りつ難儀したのは、近い手元の六字の中に頼む機もあり御助けの手柄のあるを知らずして。頼むといへば我がする助けるといへば淨土に御座ると考へて。他力くといひ乍ら、自力意業の此機をなぶり頼めば御助け頼まねば、たとひ親でも助けては下さらぬ。頼む此機と助ける法を出合ひするか交換するか。信心の切符で

御助けの船に乗る様なつもりになり。機法一體を二體に離し、離した二體を又一體に合せて見ても繼子育ち。破れた茶碗を焼接して用ゆるやうな氣まづい危い心地の取れぬ聽聞では、今度の後生の用には立ませぬゆる。何卒明信佛智と明かに六字の手柄に滿腹の出来るまで聽聞に心をいれて下さい。

夫に付いて拙者が先年のこと、或派内に有名なる布教者が、井戸の中へ落たものが引上げて貰ふ譬を以て、他力信心の味はひを滔々と勸めて御座る法席で、聽聞致したことがある。其話しの大要は。廣い野原に古井戸がありて、其井戸側が残らず腐つ

てしまひ、草が覆ひかゝつて、井戸があるさへ確乎にわからぬ程になつてをる所へ。一人の少女が草摘に來て、誤つて其井戸へダボーンと落ちてしまふた。サア少女は驚いて助けてくれ、と呼べど叫べど野原の中で人はゐない。何んとかして上りたゝりも足がゝりもない。そこへ細い藤蔓が一本下つてをるの、でこれ屈強の力綱、是に縋りて上らうとかゝつて見たが、殘念や其藤蔓が根本からブツ、リ切れてしまふた。もう絶體絶命可愛や少女は井戸の中で死ぬより外は仕方がないと覺悟してゐ

た其處へ。一人の男が通りかゝり、どうやら野原に人氣がするぞと尋ねて見ればいまの有様。見付た男は驚いて、幸ひ持合せた大丈夫の綱を下。サア少女よ引上げてやるから此綱に絶れよと、呼掛けられた其聲が、聞こへた少女の心はどうかや。此綱が強からうか弱からうか、と疑ふてをらるゝ場合ぢやあるまい。男の力が足るか足らぬか、と二の足ふんでをらりやうか。聞こへた一念兩手を伸ばして、絶りつくより外はあるまい。

今井戸の中へ落た少女といふは在座の我々呼べど叫べど人はないといふは、釋迦牟尼如來は三千年の昔に御かくれなされ、

彌勒菩薩は御出ましましたし。前佛後佛の中間の廣い野原に何とかして井戸の中から助かりたいと思へども。井戸側が腐つてあるとは、善根功德は腐りはて是で助かるといふ手がゝり足がかりは更になく。そこへ一本の藤蔓と譬へたは、偶に御座へ参りて、嬉しい思ひや確かの味になられたとき。是屈強の力綱、是で往生と出掛て見ても、哀しや歡喜の藤蔓は根本から切れて失せ。所詮助かる道はない、無有出離之縁と機の深信の出來た所へ。通りかゝつた一人の男とは、有縁の善知識に譬へたのぢや、本願名號の丈夫の綱を下げ與へ、罪はいかほど深くとも、我を一

心に頼め必ず助くるぞよの呼聲が。仕方しの盡きた心の底へ聞へた一念はぞうである。彼かれや是これやと二の足ふんでをらりやうか、斯かる者をも御助けは尊方御一佛ぞと信心の手を延べて絶る思ひの外はあるまい。是こゝが當流の助けたまへと頼まれた一念であるぞよといふ某師の御聞かせでありました。

三五 綱にすぎるは半自力

拙者わたくしは此御話しを聞いたとき、誠に不審に堪へられぬことになりて來た。其譯は井戸の中から綱に絶つて上げて貰ふこと

にしては、どうしても自力他力じりきたうきの出し合になる。引上ひきあてくれる男が千人力あつても、上あて貰ふ少女の力が足らぬときは、首尾よく上あることは出來ぬので。實に心配なのは少女の力ちから、サアしつかりして、モウ少しちや、と引上ひきあて貰ふ少女も金剛力こんがうりきで絶つてゐたが。僅わずかかもう二三尺の所へ來て、少女の力が盡きてしまふたら、又もとの井戸の中へダボンと沈んでしまはねばならぬは明瞭めいりやうのことである。我々われらが此度助けたまへと頼むのが、たとひ先手の呼聲で絶る思ひを起したにせよ。呼聲は先方で思ひは此方こゝら、こちらの思ひで絶るものなら、平生の時ときはそれでよ

い嬉しい難有い仰せを聞いて、斯るものをも御助けと確かに絶つてをらるゝにもせよ。彼世此世の境となり、臨終間際の僅かなところで、絶る此機にゆるみが出て、遂に地獄へ落ちてしまふやうなことはあるまいか。何れにもせよ、綱に絶つて上て貫ふ譬へでは、何んぞ詮議をして見ても、半自力半他力の分際で、絶對他力とは申されぬ。つまり届いた御助けの法の外に、受け手前の意業作業を加へて、往生をきめる話しで。是が所謂、是名正定之業の業の字を、業因の義に取りきりにしておけずして、是非業作と顯はれねば、正定業とは申されぬといふ、鎮西臭い話しになつ

てしまふのである。其様な法門は今日の話しでないから、夫は學者の研究に譲りてをいて、先づ事實に就て皆様から篤と考へて見て戴きたい。落た少女に此綱に絶れといふたら、わきひら見ずに取り絶る外はあるまいといふは。一應は誠に御尤も至極のやうなれど。そんな話しは少女の落た當時のことで、元氣も力もあるうちなら、絶ることも出来やうが。落てから一日餘りも経過たものか、又落様が悪くて半死半生になりてをるものなら、丸で話しが滑稽になりてくる。少女の落たは何時でもよいが、御互の落たは何時でせう。皆様は是から落るやうな考へを

持つては御座らぬか。

拙者が若年ころ京都にゐて宗乗の研究をさせられたとき、何の話の行掛りであつたか忘れてしまふたが、『我々は生死の海に浮きつ沈みつ苦しんでゐるもので』と辯じ出したところを、師匠が聞いて御座つて、『松澤』『ハイ』『貴公は今生死の海に浮きつ沈みつといふたが、貴公は何時生死の海に浮いたことがあるか』と仰しやつたから拙者は臆面もなく、『只今浮いてゐることゝ思ふでゐます』と御答へ申したれば師匠は大喝一聲、『何馬鹿をいふてをる今が沈んでをる最中ぢや』といはれたの

で拙者は少し合點がゆきかねて、『然らば生死の海に浮いてをるものは、どの様な御方でありませうか』と御尋ね申したれば、『さうぢや浮いて御座るは、龍樹菩薩や天親菩薩のやうな御方々である』と教へられたことを今に忘れませぬ。成程龍樹天親の菩薩方が浮いて御座るものとしてみれば、我々は夫より四十段も深い底に沈んでをるので、これから落ても地獄と餓鬼と畜生の三段だけぢや、而も御和讃を讀んで見れば、生死の苦海ほとりなし。浮きつ沈みつの我等とはいふてない。ひさしく沈める我等といふてある。ことに善導大師の機の深信釋には、自身

は現にこれ罪惡生死の凡夫曠劫より以來常に没し常に流轉してとあれば現在常没の我身である。常没といふは海の表面には顔でも出す氣遣ひのない貌ちである。然るに私から初め、是から落るか、是から沈むやうな考へで師匠に叱られたのは全く機の深信のない證據であつた。そこでいよく常没常流轉と、久しく沈みきつたる此身なりと、機の絶對なる價值が定つて見れば、今井戸に落た少女に、此綱に絶れよと聞こへた一念兩手延ばして絶る思ひの外はあるまいなどいふ、正氣の出合話では、一向絶對他方の法にも合す機にも合ぬ、世間普通の造り話で。つまり一時難有がらせの御伽話になつてしまふ次第である。

三六 唯信鈔の取捨

然るに此綱に絶つて引上て貰ふ譬へは、某師が自身で考へた話してはなく。皆様も御存知の通り、唯信鈔といふ御聖教に出

てあるので、其文を讀んで見ると。
 タトヘバ人アリテ高キ岸ノモトニアリテ登ルコト能ハザラ
 ンニ、カラ強キ人岸ノ上ニアリテ綱ヲオロシテ、此綱ニトリツ

カバ、ワレ岸ノ上ニ引登セントイハンニ引ク人ノカラヲ疑ヒ、
綱ノ弱カラシコトヲ危ミテ、手ヲオサメテ是ヲトラズバ、岸ノ
上ニ登ルコトヲウベカラズ、偏ニ其言バニ隨ヒテ、掌ヲ延ベ
テ是ヲトランニハ、即チ登ルコトヲウベシ、佛力ヲ疑ヒ、願力ヲ
頼マザル人、菩提ノ岸ニ登ルコト難シ、タゞ信心ノ手ヲノベテ
誓願ノ綱ヲトルベシ』とある、譬への様子は多少違ふてをる
けれども、根本の味はひは同じことなので。拙者は某師の説教
を聞いて不審が起ると同時に、此唯信鈔の御譬へが心に落んこ
とになつて來た。どうしても自力他力の出合話で、二十願の味

はひには譬へらるゝが。第十八願の絶對他力の味はひには用
ひられぬと思ふてをれど。拙者の所存が間違ふてをるので、某
師の説教の通りでよいのかしらんとも思はれ。聖教としては
捨てられず、自己の信仰としては用ひられず、心甚だ迷ふて來た。
殊に此譬へ一つのことならば、取るも取らぬも抜けものにして
おかるゝが。絶對他力の立場からいふて見ると、綱に縋つて引
上て貰ふやうな味はひでは、信仰の全體が動いて來る。自分の
信仰に動き出されては、説教も法話も出來るものではない。五
三の友人に質問をして見たが、誰も満足の解答を與へてくれぬ

ので。もう仕方はない、一時も捨て、はおかれずして。急に汽車の中へ飛込んで、三百哩を夢の心地に走りつけ、京都の舊師に拜謁し、久瀧の御禮をのべ。早速來意を告げて、質問の矢を放ち。
 『此唯信鈔の譬へは、到底當流の安心には合はぬやうに思はれますが。信心の手を延べて誓願の綱をとるべしとあるは、如何に得たものでせう』と御尋ね申上げたれば、和上は餘り愴惶たる拙者の様子を見咎めて、『松澤貴公は近頃廢學してをるものと見えるな。常に書物さえ讀んでをれば、是しきのことには周章る用事はないのぢやに。學問をやめてをるから、解りきつたこ

とが解らぬやうになつてしまふ。貴公は唯信鈔は何人の御作か知つてをるか』「ハイ、彼書は聖覺法印の御作であります』
 『ム、聖覺法印は當流の祖師様か』「イエ、祖師様ではありません』
 『ソレ、當流の祖師でない御方々の書物を讀むときは、必ず相承の祖師様の御眼鏡をかりて讀めど、いつも教訓ておいたのを忘れたか。安心決定鈔を見るには、蓮師の御指圖に従はねばならず。殊に唯信鈔には、吾祖が唯信鈔文意といふものを書いて下されてある。假名書の平易の唯信鈔を、唯信鈔のまゝに用ひてよいことなら。吾祖が文意を御書きなさるゝ必要はない。

たとひ吾祖が兄弟子として崇めて御座る、信の座におつきなされた聖覺法印でも。安心の極致に至つては、同意のならぬことがあり。唯信鈔を其儘用ひかねる點があればこそ、吾祖は吾祖の御眼鏡で唯信鈔を御讀みなされた味はひを、文意として書き残し下されたものである。此故に都て他宗他派の書物を扱ふには、當流の安心に合はゞ取るべし、合はざれば遠慮なしに捨るべし。殊に今の綱に絶る譬へは、吾祖は御用ひなさらぬから、文意の中には除いてあるぞ』と、懇に和上の御聞かせに預つたので。拙者は實に夢のさめたる心地して、一つは自分の輕卒を

恥ぢ、一つは和上の明教を謝し、厚く御禮をのべて歸國したことがある。夫れより以來拙者は此綱に絶る譬へは、斷然用ひられぬことに確信が出来。祖師聖人が唯信文意の中に、御用ひ遊ばさらぬ思召もわかり。大に鼓吹したいことになりて來たのであります。

然らば御文の中に、ひしと絶り參らする思ひをなしてとある、此思ひは自力であるか。絶對他力には絶る思ひは要らぬのか、といふ難問が起つて來る。是がいよゝ自力他力の水際のわかれめで、大切などころであるから。皆様も心を静めて暫時次

席を待つて聞いて戴きたい。

三七 攝取の網が純他力

勸修寺村の道徳が正月の元日に蓮如上人の御前へ御見舞申し上たれば、上人は取敢ず。『道徳はいくつになるぞ、道徳念佛申さるべし』。とのたまひて、其念佛に自力と他力のあることを御示し下され、最後に至りて、『他力とは他の力といふことなり、此一念臨終までとほりて往生するなり』。と仰せられた事が、御一代記の初まりに載りてある。他力とは他の力といふことなり。

とは、いかにも手短かの御化導であるが。今日御集りの皆様のうちに、其他の力といふものが確かに我身へ届いて御座る御方が幾人あるでせう。恐らくは稀のことではあるまいか。越後の香樹院師の仰せにも、歴々の大學者から始め、國に一人といはるゝ程の同行に至るまで、大方鎮西の風下に立てをるのが、残念でならん、と御歎きなされてあります。實に御互の聽聞には、其様な嫌ひのありがちなことで、拙者から初め己は間違ふてをると思ふて、間違へてをる氣遣ひはないが。間違ひない／＼と思ふて、間違へてをるのが、眞の間違になるので。此世の間違なら

取返しもつきませうが、未來の問題計りは間違ふたまゝで出掛けて仕まふたら。無量永劫取返しはつきませんから、大事の上にも大事をかけて聞いて下さい。

兎角皆様が口では他力くといふてはをるが、其他力が實際に我物になりてをらぬものゆゑに。心にはいつも自力意業の手離れが出来てない。偕又其自力意業は、あかんぞくと勿除て仕まふと、遂には無念無想の法體にかたよつて來て。仲々正意の安心に基きかねて御座るのは、ツマリ他の力に接觸してないから起る間違で。絶對他力の御助けに遇ふて仕まへば、信心

も安心も絶るも任せるも、一時に具はる譯なれど。折角御助けに遇ふては見ても、其御助けが井戸の中へ綱を下て貰ふたやうな丸で輕業騒ぎの御助けでは、到底自力意業の世話のぬけやう道理はない。無理に自力の手を切れば、更に御助けの手係りのない法體安心になつてくる。そこで拙者は唯信鈔の綱に絶る譬へは、確かに鎮西風の譬へにて、斷然當流には用ひられぬことを、委しく前席に御話し申した次第である。

然らば當流の絶對他力の味はひは、何なる相であるやといふに。抑も阿彌陀如來は、一本繩や二本繩をぶら下げて、衆生が絶

れば引上げてやる。縫らぬ間は仕方がないといふやうな呑氣の本願は建てない。五本や十本どころかや、百本千本萬本と、さても濃かに出来上りたが、八萬四千の光明の網である。其網を以て生死の海の極底に沈みきつたる此私を救ひ上げて下さるゝが絶対他力の攝取の御働きであります。サア網にかけて上て戴くことになれば、上げて貰ふこちらの方では、縫りてをらうとをるまいと。縦にならうと横にならうと、逆さになりてをらうとも、更に差支はない。是が眞の他力づくめで、塵毛も自力の世話のいらぬと同時に、精神的に危ふげもなく、必至と縫る思ひと

いふはこゝの形である。アノ網にかゝつた魚を御覽なさい、此方の世話のいらぬどころか、ピン／＼とはねまはり。逃やう／＼と命がけにやつてはをれど、逃る魚共の力より、逃さぬ網がつよいゆゑ。魚の氣儘に逃げられず、網の力で引上げらるゝ如く、御座の我等も一度び攝取の網にかけられて仕まふた上は、三毒五欲とはねまはり、貪瞋煩惱の逃仕度、朝から晩まで落る工面にかゝりてをれど。落る此身の力より、落さぬ攝取の働きが強過て、我等が勝手におちられず。彌陀の勝手に引上げらるゝとは、いかに計らふことも出来ず、逆らふことも出来ぬ、絶対他

力とはこゝのこど。網にかゝつた魚ならば、引上げられたら大騒動切られて焼かれて喰はれてしまふが彼等の因果。攝取せられた御互は、引上げられたら大仕合せ、但受諸樂の身にして貰ふが、やがて滅度の利益である。

三八 網派と繩派

夫に付いて拙者が、大正三年の十二月十日のこど。越後の西蒲原郡和納村にて、汽車の時間の都合があつて、竹内某といふ同行の宅を、久々にて訪問たことがある。其時家内のものも大に

喜び、近隣のものに夫と告たと見えて、五三の同行もそこへ集まりて来た。時節柄北國の習ひ爐邊に團樂して、一應の挨拶がすむと突然竹内の老母が拙者に申すには、『サテ松澤さん、當村では近頃の法義が二派に分れてしまふて困りました。』サテ子二派とは何派と何派かね。『ハイ網派と繩派であります。』サテモ珍しいものが出来た子、夫は一體どうしたわけ。『ハイ是は當春彼方が御説教に御出なされて、井戸の中へ繩を下て貰ふて、夫に縋つて上がるやうなこどでは、半自力半他力になる。當流は網に救ひ上げらるゝのでなければ、絶對他力の第十八願とは申

されぬと仰せられたので。其後二派に分れて仕まいました。『サテハ火元がこの拙者か子、夫は誠に氣の毒なこと、ソシテ御前さん方は何派の御仲間でありませうか。』ハイ私共は残らず網派の仲間で、アノ御存知の甲藏さんが繩派の隊長であります。『成程然らば甲藏老人は網にいられて引上げて貰ふのでは餘り他力過ぎて面白くないといふか子。』ハイ甲藏さんのいはるゝには、松澤の説教のやうに、網にかけられてゆくやうなことでは、信心もいらす、安心もいらぬことになり。寺参りも何もせんで、内に寝てゐるものでも網にかけられて連れられてゆくことになる。

當流では御助け候へとひしと縋り参らす思ひがなくては一念がたゝぬ。網の話しは法體安心だ、早く網の中から出て、縋にすがる思ひになられよと、切りに私等を勧められます。此間も甲藏さんは、拙宅の門口をのぞいて、爰の婆々はまだ網の中に寝て御座るか、日の暮れぬ内に早く出たがよいぞと、大聲で怒鳴て行かれました。『ソレハ親切の老人ぢや、夫程に勧められたら、爰の衆も暫く網から出て、縋に縋つて見るがよいぢやないか。』ハイ私共は逆も縋に縋る力がありませんもの、どうして網から出られませう。夫に付いて松澤さん、今年の夏面白いことがあ

りまして、アノ乙吉さんの息子の七歳になる丙市が、ほんたうに井戸の中へ落ちまして、ソリヤといふので直に釣瓶を下げましたところ、丙市がそれに取付きましたので。そろそろ引上げ初めると、途中で丙市が又ダボーンと落ちてしまいましたから。ソリヤ見たか、松澤さんの仰しやる通り、絶つた此手が自力ぢやで、落たくと、私共は勝鬨をあげました。『オイオイ勝鬨はよいが、其丙市はどうした子』『仕方はないで急に梯子をおろして、父親がおりて抱て來ました』『ウム〜いよいよ他力づくめで丙市は助かつたか』『ハイ〜逆も絶る自力では間に合はぬと

いふ、現の證據を見せて戴いた、是も皆如來様の御方便と。私共は大勝利になりました。『夫は芽出度い、然らば繩派の大將は降参したであらうナ』『イヤ仲々甲藏さんは負はしません』『ソリヤ又どうした譯か、此方で勝つたといふは、先方で負たときのことであらうに。此方では勝たが先方では負ぬといふては、近頃珍しい話しぢや。どうやら歐洲戦争で敵味方互に勝利をつのるやうな可笑しいことぢやのう』『ハイそこは甲藏さんのいはれますには、丙市は自分の手で絶りたのぢやから中途でおちた。當流は南無の二字まで他力廻向だ、御助け候へと絶る思ひ

は自力で起すのではない。如來様から貰ふた手で縋るのであるから、一度縋つた上は決して落る心配はないと申されます。『如來様から貰ふた手で縋るとはいかにも驚いた説明だ。併し當流は負て信をどれとも仰せられてあれば、負た勝たはごうでもよいが。大體において網がよいの繩がよいのと争ふて御座るは、譬への上のことぢやが。其網とか繩とかいふのは、實際御安心の上では、何物に譬へるのぢや、夫は解つてをるか子。』ハ、イそこの所は確かに解りませんが、『オイお婆さん、ケレ共もスレ共もないものぢや。事實後生にとつて何の事やら、か

んの事やら解りもせず、に網がよいの繩がよいのと、何をいふて御座るのぢや。まるで盲人同士のたゞきあひと申さうか、子供のなぶりあひともいさうか。後生の大事を抜けるものにして、御法義を此世の慰みものにして御座るは、勿體ないことではあるまいか。さあ甲藏や乙吉はどうでもよいが、一人くの出離の大事と心確かに落付て、篤と聞いて下され。』と汽車の時間の許す限り、委しく御話を致したことがありました。

三九 寝て居ては網にかゝらぬ

偕て皆様よ只今の話しを、何んと聞いて下された是は決して越後計りにある話しではありません。随分こゝら當りの皆様にも、同様の不審があるに相違ない。先づ第一が網で救はれる後生なら、内に寝てゐても助かるであらう。第二には網に入れられて行くことでは、頼む一念の信相がたゞぬから、法體安心になる。そこで第三には他力の手を貰ふて、其手で絶らねばならぬといふやうな可笑しい議論になりてくる。是等の問題が何から起るかといへば、都て他の力の在處を知らずして、唯だ文句の上や譬への端で、安心を定めやうとするから、此の如き間違ひ

が起るのである。

全體網や繩に譬へるは何を譬へるのかと尋ねて見れば。實際は彌陀より届けて下さるゝ名號六字の外に、何物も譬へる品はないので。此六字の價値の知りやうで、三願の味はひが分れて来る。先づ六字を以て細い藤蔓ぐらゐに見てをるのが十九の願で。生死の井戸から上るには六字の藤蔓一本では、逆もたよりになりかねるから。發菩提心修諸功德と善根功德の手掛りや足掛りを造つて、かゝらねばならぬことになる。そこで此六字は細い藤蔓ぐらゐのものではない、善本徳本の大丈夫の繩

と見たのが二十の願。繩は大丈夫で切れる氣遣ひはなければ
 も、絶りつかねは上られぬゆる。係念我國植諸徳本と名號の繩
 は離さぬやうに、きばらねばならぬ。然るに第十八願は、此名號
 が攝取の網ちやと戴かれて見れば。此方で絶る用事はない、届
 いた網の他力づくめで、往生に仕損じのないことになる。是は
 世間の數理からいふても、物理から考へても、よく解ること、總
 て他方より加へられたる力が強ければ強いほど、此方の力のい
 らぬ事になるは當り前のことで。たとひ井戸の中へ一本繩を
 下げられたにもせよ。若其繩に強い電氣力でもあつて、觸るや

否や吸付られ、身動きならぬ繩ならば、他力づくめのことになれ
 ぞ。今の話しの如く、絶れば上るといふことでは、離せば落ると
 いふ裏がある。絶ると離すとの出來不出來で、上ると落るとの差
 別が立つやうなことで、は繩其物の力といふものは、更にないこ
 とになつてくる。

皆様よ此南無阿彌陀佛の御六字に、攝取の光明の不思議の力
 用のあることは。先日委しく御話しをしておいたよもや御忘
 れは下さるまい。攝取の力のあるものなら、確かに網に譬ふべ
 きものである。而も此網は、網其物が極樂まで引接る力のある、

名體不二の不思議の網が六字である。六字が網として見れば、甲藏さんのいふやうに寺へも参らす内に寝てゐて聞かんものには、是を届ける道がない。糸で造りた網でなし、金で作りの品でない、呼んで下さる六字が攝取の網ぢやもの、参りて聞かねば届きはせぬ。参り嫌ひのこのやつが、参る身にして貰ふたも、一世や二世の話してない、生々世々の御手廻し。他力づくめに引出され。他力の聲で聞かせられ聞いた御聲に救はれて、他力他力で参るとは。どうした不思議の御手柄と思ひ餘つて口へ出る、報謝相續の念佛も、他力大行の御催促。

四〇 網相と信相

引續いて御話しを致しますが。當流の絶對他力の味はひは、井戸の中へ一本繩をぶら下て。絶れば上る離せば落るといふやうな、輕業騒ぎの危ふい他力では決してない。蓮如上人の御言葉にも、『超世別願の網には迷倒の衆生を救ひ、西方淨刹の釣針には稱名を群品を引きたまふ』と仰せられてあれば、一本繩なら釣針の附たものでなければならず。超世の別願は攝取心光の御力用なれば、確かに網に譬ふべきことは、蓮師の仰せに依

つて明瞭のことである。其攝取の力用を名號六字に封じこめ、是を我等が卽是其行として。呼んで與へて下さるゝが十七願の御約束。十方衆生の我々は其名號を聞いて信心歡喜の一念に至心廻向と網かけられて。地獄一定の生地のみ、往生一定の身にして戴くが十八願のこゝろであることは前席に委しく御話しを申しました。

夫に就て面白い話もあるもので。先年拙者が金澤に一ヶ月計り布教してゐた其時に、或同行が拙者の座敷へ来て、「松澤さん彼方の御説教は、どうも法が強過るかと思ひますが」と申

すので拙者は。「餘り法が強過て悪いか子、お前さんは機を強うして往生するつもりか子」と尋ねたれば。「イヤ法が強うて悪いといふ譯ではなけれども、彼方の説教には。頼む能機のたしかの御話しが更にない故に、參詣人が無念無想の法體安心ぢやと申しますので」と臆面もなくいふてくれたから拙者は。「然らば頼む能機を是から強めて説教しますか子拙者は法が強ければ強いほど此方の世話のいらぬことと思ふが。併し其強い法が餘處にあるので、此方に届いてなかつたら頼み力にもなるまいが。逃ても逃さぬ御手柄が、南無歸命と届いて下されてあ

る上は、是に上越す頼み力になるものはあるまい。夫でこそ自力も離れ、雑行も捨たり、一心一向己れ忘れて餘念なく、絶り任せる能機の信相が立つのである。届いた法の御手柄を別物にして、受けた能機を立てやうとするから、餘計な面倒の出るのではなからうか、此邊のところは充分注意して聞いて下さい。と申したことがありました。

前席に出た甲藏さんの御話しが、矢張此金澤の同行等と一致してをるので。他より届いた力が、網のやうな絶対のものでは餘り法が強過るから。先づ繩位のものにしておいて、其繩に絶

りた形を以て、能信の相と思ふて御座るもの故に。網にかけられて行くやうなことで、能機の信相が立たぬといふ難問が起つてくる。成程網に救はれた譬喩の上では、能機の信相は逆も立たぬ。立たぬ筈ぢや、よ能機に受けたのでもなし、信心が届いたのでもない。受けたは身體に受けたので、届いたは網が届いたのぢや。身體にかゝつた網ぢやもの、能機の信相の顯はるゝ道理はない。併し能機の信相は立たずとも、身體にかゝつた網相丈は、誰が見ても動くまい。爰でよく味はふて見て下されよ。都て何物にかゝはらず、貫ふたとか、届いたといふ相は。届いた

其物が現在に活用てをる形の外に、届いた相のあるべき譯はな
 いのである。拙者の身體に此袈裟をかけてをる、此袈裟が他力
 御寄進の品なれば、袈裟其儘を用ゐてある形が袈裟を貰ふた
 するしなれば、是を袈裟相とでも申さうか。此内陣に打敷が掛
 けられてある。其打敷の由れば、そこに掲げてある寄進札で、高
 木氏の寄附といふことが解つてをる、其寄附廻向にあづかつた
 相は、確かに内陣に活用してあるまゝが、貰ふた相是が本堂内の
 打敷相である。然るにたとひ打敷を寄附せられても、當寺の住
 職が確かに受取りた思ひがなくては、貰ふたとはいはれぬの。

袈裟はかけてゐても、やれ嬉しや、の心がなければ、獲得の相が見
 えぬなどといふては。更に解らんことになつてしまふ。今網
 の譬へでも其通りで。人間が網に救はれたといふことでは、心
 のある人間に、心のない網が掛つたことになるゆゑに。其網に
 かゝつた一念は、どうぢやなどと。つまらぬ所に話しの迷ひが
 出て來るが。一層のことに、心のない石に、心のない網が掛つた
 事に假定して考へて見て下さい。心のない石ぢやもの、素より
 信相のあるべき筈もなし、喜びも哀しみもあるべき譯はない、實
 に無念無想である。去り乍ら、網の掛つたものなれば、相だけ

は明瞭に顯はれてをるでせう。此網の掛つてある其儘の相が。石の落ちられん相沈まれん相。よりかゝり相。よりもたれ相。任せた相。絶つた相。石の力の間に合はぬ相。あらゆる相が、網其物の力用から顯はれてあるは、何人もよく御解りになるでせう。

此味はひを以て其儘信仰上に轉換して御考へ下さい。受けるこちらが石のやうなものではない。有念有想の意識の上、届いた品が網のやうなものでない。佛智無邊の御誠ぢやもの、心に心を貫ふたのが何とて無念無想になつてをらりやうか。

思ふまいぞといはれても思はれてく、思ひの遣場があらばこそ。其思ひの起るのも思はふと思ふて思ふ心起してから思ふ思ひではない。思ふ思はぬの世話なしに、たゞ思はるる思ひである。其思はるゝ相は如何かと尋ねれば、たしかに御改悔文の通りである。綱なら切れるためしもあるが、六字は切れるためしはない。無邊不斷の御利益を、聞光力の一念に綱より強い御六字が心に届いて御座るもの。何が不足で餘行餘善に心の止むべきや。なるもならぬも世話いらす、此機ながめる用事はつきて。真から底から頼まれてく、案じげもなく後生一つは

御助け候へど。彌陀に歸する心の露塵程も疑ひなくなつた信相は。誰に遠慮もあらばこそ、攝取せられた身一つに、結ばれ解けぬ御手柄で。能發一念喜愛心、繰返しても返しても、此一念が臨終まで續く相が相續心。取るなら誰か取つて見よ、破らば誰ぞ破るべし。こちらで定めた信でない助けにやおかんと我胸に届いた親が頼まれて力になつて御座るもの。親に抱かれた兒心に、人が翫れば翫るほど頼み心は増上し。何んぞ障れば障るほど、唯彌増に頼まれて。金剛不壞の信相は、人に尋ねるまでもない、胸に溢れるばかりである。

四一 信體と信相

此一念發起平生業の頼み振も、絶る形も、金剛といふも、堅固といふも、自力を捨てるも、疑ひ晴れるも。すべて信相の有文は、我々の意識の上に、確かに顯はるゝに違ひはなけれども。其顯はれた残らずが、我等凡夫の心の實質が、左様な確かのものに變化て、顯はるゝのではない。御廻向の六字の實徳能が、凡心の上にて働いて下さるゝ形を。他力廻向の信相と申すのであるから、一流安心の體は、婆々の思ひぢやない、爺翁の心ぢやない。南無阿

彌陀佛の六字の相であるぞと御示し下された次第であります。然るに體を捉へずして相を見やうにかゝり信體の外に信相のあるやうに考へて。六字は六字と別物にしておいて信相を尋ねて御座るものぢやから。網のかゝつた丈では信相の立場がないの御助けの繩の外に、縋る此手の信相を出さねばならぬのだ。面倒な話しになりて來て、甚だしきに至つては、他力の手を貰ふて、其手で縋るといふやうな。大正年間の人物には、逆も解りかねる、時代後れの可笑い議論が出て來るのぢや。皆様よ、此邊を重ねて味はふて見て下さい。石に網のかゝつた其時に、

石其物の實質が落んやうになつてから、落ん相が顯はるゝのではない。落る地金の其儘で、落られん相は届いた網の力用なることは、兒供に見せても明かなことでせう。地獄一定の我々に、落さぬ六字の御誠が届いた時に。凡夫が落んやうになつてから、往生一定の思ひの顯はるゝのではない。落る實機の其儘で、往生一定の味はひは、届いた六字の力用なるがゆゑに。是を凡相といはずして、信相と申すのぢや、六字が信で働く形が相である。そこで能機の信相といふことを、平易に解釋して見れば。我機の上に六字の働く相といふことである、石の上に網の働

く相が網相。身體の上に袈裟の働く相が袈裟相。内陣に打敷の働く相が打敷相。意識の上に六字の働く相が信相で。身口二業の上に六字の働く相が行相である。能信能行共に是六字の働きにして、其働く場所が有念有想の意識の上に働いて貰ふては。どうしても無念無想になりてをらるゝ譯はない。火に觸ればあつやの心地が顯はれ、砂糖をなむれば甘やと働く。今此六字はどう働く。一つや二つの働きではない。雜行を捨てるとなり、自力を離るゝとなり、安堵となり、決定となり、頼みとなり、力となり、後生助けたまへとなり、疑ひ晴るるとなる。働く相

は種々あれど、其體皆是六字一つの仕事より外はないことである。

そこで、此體と相といふことに付て、もう少し委しく御話しがして見たいが。皆様よ先づ此佛前に莊嚴れてある、佛具を御覽なさい。輪燈、花瓶、燭臺、香爐、御佛器も、鶴龜も、相は種々に別れてあれど。其體を押さへて見れば、一つ眞鍮の外はない。其眞鍮が火の力で溶されて、鑄型の中へ注込れると、忽ち鶴となり、龜となり、香爐となり、花瓶となる如く。鑄型が百あれば百の相となり、千あれば千の形となる、佛具残らずの體が眞鍮の相である。

今一流安心の體殘らずが南無阿彌陀佛の六字の相。六字の眞
鑰を善知識の踏鞴にかけて、嚙んで碎いて溶かして。我等が心
のどん底へ聞其名號と流し込んで戴く時に。我等が手元に種
々の鑄型があるから、様々の形が顯れてくる。是を信相と申すの
で。今其一つ二つをいふて見れば。先づ我々の手元に、佛にな
るのちやもの、少しは善い心にならねばなるまいといふ。罪福
心の鑄型のある處へ南無阿彌陀佛の御助けが溶け込んで下さ
るゝと、忽ち雜行を捨るといふ形が顯はれてくる。極樂へ參る
のちやもの、何卒此機をたしかにしてといふ自力の鑄型のある

處へ。他力至極の六字が入満ちて下さるゝと、忽ち自力を捨る
相が出来る。出掛る未來が心配でならん鑄型へ六字が届くと、
安堵となり。後生一つに定まりのつきかねた鑄型へ、御助けが
届くと決定と顯れ。妻子珍寶何一つ頼み力になりかねる鑄型
へ落さぬ六字が溶けこんで下されて、頼み力と顯はるゝ。後生
一つは助け人のない其處へ、助けるぞよと届かせられて、助けた
まへと思はるゝ。親子夫婦の中でさへ疑ひだらけの心の底へ、
必ず助くる御手柄が響かせられた一念に。此心の露塵ほども
疑ひなければと晴られる。此信相の數々が、一つく順々に出

來てくるよな譯ではない。聞其名號の一念に思ふ思はぬ世話もなく、六字一つに具足してある働きなればこそ。此道理あるが故に、六字を押へて、我等一切衆生の往生の體は南無阿彌陀佛と聞こえたりあなかしこくと御結び下されてある。

さあ是で皆様御呑み込が出來ましたか。一流安心の體は、更に凡夫の仕業ではない。南無阿彌陀佛の六字一つの働きの機の上に顯はれて下さるゝ形を、能機の信相と申すので。全く自力意業でないといふことは明瞭でせう。然るに意業を除けては、無念無想にならうかと心配し。意業ときめれば自力にな

つてしまふので。サテハ自力にもあらず、無念無想でもない確かに有念有想の絶る思ひを起させて。夫を意業でないことにして。美事他力に通用させたい所存より。自分の手で絶つたのではない、他力の手を貰ふて、其手で絶るのちやといふ。可笑しい議論が随分世間にあることで。是は數多の人の迷い易い所であるから、次席に委しく御話しを致しませう。

四二 他力の御手

前席に於て御話しを申した、他力の手を貰ふて、其手で絶ると

いふやうな。珍無類の可笑しい議論は何から迷ひ出した話しであるやといふに。是は御助けの法と頼む機を別物にして、阿彌陀佛の四字と南無の二字を離してしまひ。二字で四字を引付けるやうに考へて。頼めば御助け頼まねば御助けに合はれぬ。而も其頼むのが、我心で頼むのでは自力になるゆゑに。他力より頼み心を貫ふて、其他力廻向の頼み心で、御助けを頼むといふやうに心得誤りて。彌陀の御助けが此機に届いた其儘の形が、南無歸命と顯はるゝといふことを知らざるが故に、斯る議論が起りて來るので。是が眞宗の眞宗たる安心の根柢から動いて

來る大問題であるから。迂濶に聞いて下されては、無量永劫の仕損じになりますぞ。

此前にも委しく御話し申した如く。信心を切符のやうに思ふて、親の態仕立の御迎ひ舟に。乗込む手元に、切符を貫ふてから、乗らねばならぬといふやうな話しも。又届いた法の外に、受心がなければならぬといふやうな考へも。共に此他力の手を貫ふて絶るといふ意味と同一の間違である。一つ違へば何處迄も違ふてくるは勿論のことなれども。餘りといへば口惜い程の間違である。

皆様よ能く考へて見て下さい、他力の手を貫ふて其手で絶る
 といふは。抑も何んたることでありますか。蓮如上人の仰せ
 の如く、他力とは他の方といふことなり。他の方といふは、他よ
 り届いた方といふこと。此珠數に拙者の手が懸りてある、此拙
 者の手が珠數からいふ時は他力である。其御兒さんが母親に
 抱かれて御座る。其抱て下された親の身體が、御兒さんからい
 へば他力と申すのちや。拙者の手で握りた上は、珠數から特別
 に手を出して、絶る用事はあるまい。拙者に握られたまゝが、珠
 數の絶り任せた形である。親が抱て下された外に、子供から絶

りつく世話はあるまい。親の離さぬ他力のまゝが、子供の精神
 的に絶り任せた形にして。子供の方では時に睡りて居やうと、
 泣いてゐやうと、絶り任せた形は動かんで。泣いてゐたまゝ
 眠りてゐたまゝで、親に抱かれてをる。ソレ夫丈の相の上に、た
 しかに計らひなく親に絶り任せてをる形は、明瞭に顯はれてあ
 るから。抱た親の相の外に、兒の抱かれた形はない。是が所謂
 四字即二字、二字即四字で、機法一體の味はひである。其機法一
 體の御六字が、全く御助け法、即ち親様である。其助けの法たる
 六字の親様が、赤兒に劣る此機の内へ届いて下された信の一念

が頼まれたのちや助かつたのちや。そこで法も六字なり、機も六字なり、御勸め下さる所行所信の法も名號不思議の信心を、ひとしくひとへに勸めしむ。受るこちらの能信能行の安心の體も、南無阿彌陀佛の六字の相なれば。一應いへば南無はたのむ阿彌陀佛は御助け、と二字と四字とに分らるゝものゝ。再應尅實して見れば頼むも六字、御助けも六字である。是を彌陀からいへば、頼むものを助けるといふ、衆生からいへば、御助けを頼むといふ。法より機に向ふたときと、機から法に向ふた場合で、言葉に左右はあるものゝ、仕事に二つあるのでない。頼むものを

助けると仰せられても。おまへが頼めばおれが助けるといふ、相談づくの仰せではない。頼めば助けるといふ呼聲其儘が、御助けの六字である。其御助けの六字がいよゝ御助けであつたかと、法の儘が此機に届いた一念に。此方から出す自力頼みの手が引けて、先方より届いて下された御助けの他力其儘が。頼み力と顯はれて下さるゝ是を他力廻向の頼み心といふのちやから。他力の手を貰ふて、其手で絶るといふやうな、阿房らしい譯ではない。他より届いて下された御助け一つが頼まれた形絶つた形である。

是を三帖目初通の御文より伺ふて見ると。タヰカノ阿彌陀ヲ一向ニタノミマイラセテ、一念モ疑フコ、ロナケレバ(二字)カナラズ助ケタマフベシ(四字)と仰せられて。たのめば必ず御助け下さるゝが併しその頼む心といふも、自力から出すのでもなく。他方の手を貰ふて頼むやうな次第ではない。四字の御助けが届いたまゝが南無と頼む信心ぢやといふことを顯はして、次の御言葉に。サレバ一念歸命ノ信心ノサダマルトイフモ(二字)コノ攝取ノ光明ニアヒタテマツル(四字)時尅ヲサシテ信心ノサダマルトハマウスナリ。と二字即ち四字、四字即ち二字の味

ひを御知らせ下された。そこでいよいよ最後にいたりて。シカレバ南無阿彌陀佛トイヘル行體ハ。と六字を押へて。スナハチ我等ガ淨土ニ往生スベキコトハリヲ、此六字ニアラハシタマヘル御スガタナリト(所信)イマコソヨクハシラレテイヨクアリガタクタフトクオボヘハンベレ(能信)。と所信も六字、能信も六字なることを。明瞭に御聞かせ下されてある。さて皆様よ、所信の能信の二字の四字のと、斯る面倒な御話しは。御解りになる御方もあるであらうし、又御解りならぬ御方も多からうが。大體八十通の御文有丈は、皆様に面倒かけやう

とて御書きなされたのではない。世話のいらぬ御六字で、面倒なしに助かるから六字一つで満足せよと御親切極まる御勸めである。依つて魚津の御講師が、『八十通の御文は六字の御延書と見よ』と仰せられたことが拙者の耳に残つてをる。此御一言は實に忘れてならぬ格言であります。御文計りではない、一切の聖教といふも、たゞ此南無阿彌陀佛の六字を信せしめんがためなりと思ふべきものなりとあれば。代々の善知識の御苦勞は、只此六字で助かるぞよの御勸めより外はない。六字で助かるものならば、目鼻形はなけれども、是が親とも佛とも、名

體不離の親様が。心に内薫密益と届いて御座る其外、何の不足がありませんか。頼んだ形がほしければ南無阿彌陀佛が届いて御座る。助かつた相見たいなら六字の親が来て御座る。借りた證據も證文一本貸した證據も證文一本。借りた證據と貸した證據と、證文二本あるのでない。僅か一本の證文が借りた證據にもなり貸した證據にもなる。彼方方の心の内へ届いた六字の證文が。彌陀からいへば、夫が助けた證據ちやぞや。衆生からいへば、頼んでしまふた證據である。助けた證據も南無阿彌陀佛、頼んだ證據も南無阿彌陀佛、落とさん證據も南無阿彌陀佛

陀佛絶つた證據も南無阿彌陀佛。六字一つの御助けで、満足出來たありなりが、絶る此手に世話いらす、ひしと絶る思ひである。

四三 鎮西の四字尊號

兎角届いた六字の御助けの外に、絶る此手がなくてはならんの頼む思ひがなければ能信が立たぬのと。此機の世話のやまぬのは、全く六字の御助けが貰はれてないひとのいふことである。金が貧乏の懐中へ届いた外に、御禮報謝の場合ならいざしらす、一念の場に、彼の思ひの此心地のと詮索してゐる馬鹿はあ

るまい。金さへあれば、心配もなくなり安堵も出来る。其出來た安堵といふものが、せねばならぬぞかゝつて安堵したのではない、安堵せんでも宜しいといはれても。此方から出す安堵なら、明日にも延ておかるゝが、向ふより届いた金の力用まで。出來る安堵の信相は、此方の勝手に差引ならぬ。是が他力廻向の金剛不壞の信相たる味はひである。然るに受心がなければ、受けた相が顯はれぬのと思ふて御座る御方は、受けた相がないのでなくて、實際に受けた品がないのである。受取つた品を尋ねずに、受けた心地や味はひに苦心して御座るのは、全く六字

の御手柄が獲得出來てない、鎮西流の風下に立て御座る御病人である。

そこで少し六ヶ敷いやうではあるが、鎮西宗と此真宗と宗旨の違ひめは何處から分れて來たか、といふことを御聞きください。其分れめは大體西方淨土の親様の御名稱が違ふてをるので。鎮西宗は四字尊號と立て、淨土真宗は六字尊號と立てる。此四字尊號と六字尊號の御話しは、丸で一宗を提携てかゝらねばならぬ議論で。不學の我々では、逆も充分の御話しは出來ないが。委しいことは學者の研究に譲つておいて、今は肝要の味

はひだけを御話し仕て見ませうが。あらう事かない事か、天にも地にも一佛さへ在さぬ如來様の御名稱が違ふと、いかにも怪訝いやうではあるが。先づ鎮西宗の曰分を聞いて見ると。西方淨土の御本尊は、阿彌陀佛といふ四字の御名稱である。南無といふ二字は、衆生からつけるのちや。南無はたのむといふこと。金がいるで檀那様を頼む、病氣で困るで醫者を頼む。用事のないものに南無と頼む譯はない。子供がほしいで地藏様に南無する、目が煩いで御不動様をたのむ。其時に南無地藏大菩薩南無不動明王と稱へるので。南無藥師如來南無大日如來

何れの神でも佛でも頼みますぞが南無の二字。今は助かる縁のない此身の後生の一大事助けて下さるか尊方一佛なればこそ助けたまへと此方から。頼んで出る時に南無阿彌陀佛と申すので。南無の二字は衆生よりつけたもの、彼尊の實名は阿彌陀佛の四字である。然るに一向宗では、六字の名號ぢやの、南無阿彌陀佛といふ佛ぢやの、といふてをるは。大間違ひの次第である。と鎮西宗では批難をするところであります。

そこで彌陀の御名稱が四字だか六字だか戸籍調べをして見ると鎮西宗のいふのが御尤もぢや。佛の戸籍は御經より外は

ない。先づ阿彌陀經を讀んで見ると、佛長老舍利弗に告げたまはく是より西方十萬億の佛土を過ぎて世界がある。名けて極樂といふ、そこに佛が御座る、何んといふ御名稱か阿彌陀と號すといふてある。而も御經の中程に彌陀の名義を御説きなされて。舍利弗何が故に彼佛を阿彌陀と號する、彼佛は光明無量なるがゆゑに阿彌陀と名く、壽命無量なるが故に阿彌陀と名くと仰せられてあれば。たしかに鎮西のいふ如く、尊方の實名は阿彌陀の三字で、佛は諸佛の通名であるから。阿彌陀佛の四字尊號であるに相違ない。南無阿彌陀佛と名けるといふ、六字の話

しは御經の戸籍に載つてない。觀經の下上品と下々品には、稱南無阿彌陀佛と、六字になつてあるけれども。彼は衆生の機に渡つた名號であるから、南無の二字は惡人の心から出した南無地藏菩薩南無大日如來の南無と同じものかも知れぬ。さうして見れば、鎮西宗のいふ如く、四字尊號の如來様であるといふのが、御經の文面に叶ふてをるやうである。

然るに淨土眞宗に於ては、彌陀の名號は六字にして、南無の二字は衆生から出すやうな諸佛通途の南無ではない。尊方の御名稱に、南無の二字まで成就してあるのちやと、立る次第であります。併しその南無の二字は、御經の戸籍には出てないものを。何處から持つて來て六字にするか。サア爰が眞宗別途不共の法門でありまして、實に絶對他力の信仰の基くところは爰でありますから。何卒耳を澄して聞いて下さい。

四四 眞宗の六字尊號

前席より引續いて、鎮西の四字尊號と、當流の六字尊號といふことに付いて、御話を致します。是は一流安心の根柢に觸れて來る重要問題でありまして。拙者如き不學淺識のものでは、逆

も充分の御話しは盡されもせず。又皆様方もかゝる奥深い問題に御聞きになる必要もないやうな譯であります。併し此違ひめを一應聞いて下さらんと。絶對他力の真宗ぢや、他力廻向の信心ぢやといふてゐながら。不知くの内には鎮西風に傾いて、他力より頼み心を戴いて。其頼み心で又御助けを頼むといふやうな複雑な考へを起し。遂には他力の手を貰ふて、其手ですがるといふ。いかにも滑稽じみた話しになつて來るのであります。

皆様は鎮西や西山と申せば、丸で關係のない旅か他國の話し

のやうに思ふて御座るかはしらねども。惠空講師の御言葉にも。「元より吉水の一教何ぞ水火の異あらんや」と仰せられて、西山の善慧房も鎮西の聖光房も、我祖聖人と共に膝を並べて吉水の禪室で、同じ御師匠法然上人の、一つ御化導を蒙りなされたものなれば。他宗他門といふてはゐても、何ぞ水火の異あらんやで。水と火程の違ひのあるべき譯はないので。只聊かの聞様の違ひから、宗旨が分れて來たものなれば。爰に御集まりの皆様も、我身は真宗のつもりで御座つても、聽聞の角目が少し違ふてあつたなら。心の内には鎮西になつて御座る御方もあり、

西山に内通して御座る御方もあるのですから、随分注意をして聞いて戴きたい。私等の先生が時々御話しに、眞宗の正意を知りたくば、宗内丈の研究では、逆も解らん。必ず浄土宗の家々の義を詮衡して研究せねば。到底祖師の御己證は知れるものではないといはれたが。成程宗内も宗内、或一派内位に屈み込んでゐて。頼む一念がなくてはすまんの、イヤ誰某は頼むも信するも不要といふた、夫は異安心是は御正意のと内輪話の騒ぎ計りをして見ても、何の所詮もないことである。既に鎮西宗のいふ如く、彌陀の尊號は阿彌陀佛の四字なることは。經說分明

にして、動かすことの出来ないうへは。南無の二字は必ず衆生から出すべきものぢやといふてをるのに。我宗では飽まで六字尊號と立て、南無の二字まで彌陀の御名稱とし。そのみならず、衆生の頼み心まで、他力廻向と談ずるは。何處から南無の二文字を持出して來て、其様のことがいはるゝのぢや。サア皆様耳を澄して、爰の味はひを聞いて下さい。

まことに鎮西宗のいふ如く、彌陀の名號は阿彌陀佛の四字に相違ない。六字の名號といふことは、御經の上に説いてない。然らば南無の二字は衆生からつけねばなるまいが、と鎮西宗で

はいふけれど。彌陀の名號に局りては、衆生から出す南無の頼みは不要である。なせなれば、阿彌陀佛の四字がたゞの四字や、たゞの名號で、諸佛並々の御名稱ならば。衆生から南無と頼んでかからねばならねども。阿彌陀佛の四字には、彼尊の光壽二無量の御徳がある計りではなく。及其人民無量無邊と御説きなされてあれば。參る衆生の有丈まで、光壽二無量にして下さるゝ御徳がある故に。阿彌陀佛をば、無量壽佛とも、無量光佛にも申すので。一切の諸佛にも壽命や光明は随分無量に持つて御座つても。御自分のみの光壽二無量で、一切衆生を光壽二無

量にして下さるゝことが出来ぬから、無量光佛とも無量壽佛とも名乗られぬ。米や味噌は何家にもあるが、自分で用ゆるだけの米味噌で、人に何程でも仕送りの出来ぬ家ならば、米屋味噌屋の看板は出されぬ。然るに阿彌陀如來は難有い、彼尊が無量壽にましまして、一切衆生にも無量壽の仕送りが出来。彼尊が無量光で御座るのを、惡人凡夫にまでその無量光を與へて下さるゝので、無量壽佛とも無量光佛とも名乗りを上げて下された。而も其一切衆生を光壽二無量と助けおはせて下さるゝ御利益が、此阿彌陀佛の四字にこもつてあることは、善導大師の即是其

行の御釋で明了である。四字で助かるものならば、四字の御助
 けの外に南無と頼む用事はあるまい。鎮西は此四字の價値を
 知らずして阿彌陀佛の御助けが遠い淨土に御座ると思ふてを
 る故に。四字の外に、二字の頼みを我身が出して南無阿彌陀佛
 と稱へづめ臨終來迎を願ふ、難儀の頼みをしてをるのぢや。今
 淨土眞宗は西方に御座る御助けを、此土で頼んでをるのでない。
 爰へ届けて下された、四字其物が光壽二無量の御助けなれば。
 御助けの外に、頼み心は出さずとも、御助け其儘が南無と頼める
 由れある四字なるが故に。四字即ち二字で、二字即ち四字。四

字の外に二字をつけて、六字にするのでもなく。四字の中から
 二字を引出して、六字にするのでもない。四字の御助け其儘が
 六字にして、六字其儘南無と頼める二字である。此故に觀經の
 下品下生の南無阿彌陀佛も、顯説といふて、御經の表向きからい
 へば、悪人の機から出した自力の南無を阿彌陀佛に添はせた六
 字であるけれど。經の隱彰といふて、内實から伺ふて見ると、悪
 人から出した南無でない。阿彌陀如來の眞實心中に作し給ひ
 し、御助けを須ひた形が南無と顯はれたものなれば。南無の二
 字まで他力廻向で、二字即ち四字の六字全體が、彌陀の名號であ

る。

借て皆様よ御解りになりますか、定めて御解りになりますまい。尤も四字尊號と六字尊號の問題は、三經七祖の論釋を殘らず調べてかゝらねばならぬ、大問題であることなれば。一座や二座の御話しでは、何んと致し方もありませんが。ツマリ鎮西の頼みは、御助けに離れた自力頼みで。眞宗の頼みは、御助け其儘の働きが頼み心と顯はるゝのちや、といふことを皆様に吞込んで戴けば、夫でよいのであります。鎮西は四字で足らんで、二字を我れから出して六字とする。眞宗は四字で餘りて二字と

なり、二字即ち四字の六字とする。鎮西は頼むと御助けが二つあるから、頼めば御助け、頼まねば落る。眞宗は頼むと御助けが一つであるから、頼んでから助かるのでもなく、助かつてから頼むのでもない。頼んだのが助かつたのちや、助かつたから頼まれたのちや。そこで鎮西は頼むと御助けが、彌陀と衆生の出合ちや。眞宗は頼むと御助けが、六字一つの御由れちや。是を機法一體の六字といふのであります。

皆様は、火といふものゝ、其中に二つの由れのあることを御存知でありますか。先づ第一には日本中の人々に、熱やと思はせ

る由れがある。第二には熱やと思ふ一念に焼傷させる由れがある。熱やと思ふが機の方なり、焼傷させるが法の方なり。是が機法一體で、熱やと思ふてから焼けるのでもなく、焼けてから熱やと思ふのでもない。焼けるから熱いので、熱いから焼けるのちや、アチャヤケ。ヤケアチャ一念同時である。然るに夫を熱やと思ふたから焼けるのちやと聊かのところを誤解したので。熱やと思はねば焼けぬから、熱やの思ひがなくてはすまぬと、段々深海へ迷ひこみ。熱やの思ひに苦心して、遂には義理や理窟におちいり。此熱やの思ひに三義がある、一つにはツンとした

思ひ、二つにはピリ／＼する思ひ、三つにはポーポとする思ひ。此三義が揃はねば、ほんとの熱やの思ひではない。是がツンとした味は、是がピリ／＼、是がポーポと、稽古にかゝり。ツンピリポー／＼と、何年工面して見ても、焼傷する氣遣ひはありません。焼けぬも其筈、大事の火に觸つてをらぬのちやもの。火にさへ觸れば、稽古いらすに熱やの思ひは只起る。起きた思ひの其中に、ツンもピリもポーも一時に具足して仕まふのちや。此故に、熱やの思ひを起すには、智慧もいらす才覺もいらす、富貴も貧窮もいらす、善人も悪人もいらす、男子も女人もいらす。ただ

もろくの御世話をやめて、火に觸るを以て本意とす。此方の
 思ひで起すなら、智慧や才覺もいるであらうが。届いた火が熱
 いもの、小供あつたいし大人も熱い、男も女もみな熱い。其熱やと
 思ふ一念に、焼傷したので、熱やと口に叫んだのは、最早や後念の
 行である。

今當流の安心も此通り。鎮西宗は火よりも熱い御助けが阿
 彌陀佛の四字であるといふことを知らざるが故に。四字の外
 に、頼む思ひをこちらに出して、助けて貰ひにかゝつてをる。假
 令淨土眞宗の御方でも、此御助けの由れの解らぬ人々は、鎮西流

の病氣を頼ひ、頼む能機に苦心して。遂には法門や學問沙汰ま
 で持出して頼む思ひに三義がある。一つには頼み力にする義
 二つには絶り任せるの義、三つには請ひ求むるの義。此三義が
 揃ふた思ひでなければならぬ、イヤ三義平均に揃ふては、却て悪
 い。信順が七分で、請求が三分。葛根湯でも合せるのか、甘草が
 三分で陳皮が何分、調合安心盛立て、是で往生と定めては見て
 も。助かつたやら助からぬやら、大事のところ、解らぬゆゑ。
 安心といふはほんとの名計り、心の奥はいつも黒闇大心配が残
 つて御座る。

抑も當流の信心をとらんするには、智慧もいらす才覺もいらす、世話もいらねば心配もいらす。たいもろくの難行を捨てて、正行に歸するを以て本意とす。その正行に歸するといふは、南無阿彌陀佛の御助けに、満足出來た形ゆる。何んの苦もなく世話もなく、阿彌陀如來を一心一向に頼まれて。寝るも大悲の懷ろ住居起るも攝取の膝の上。一期の命つきぬれば、必ず淨土へ此私を送り給へる御相が南無阿彌陀佛で御座るもの。頼みにするなどいはれても、持掛頼みするのではない、御與へ頼みは何んどせう。ほんとに頼むが悪いなら、助ける此手を御引なさい。

助ける此手が六字なら頼む思ひも私しや知らん。六字一つの力用で、『頼まれて頼ませたまふ彌陀なれば、頼むころも我とおこらじ』抱きあげて抱かれさせるが親なれば、抱かれる世話は兒にはいらぬ。是が機法一體の御六字を戴かれた、信心決定の相である。

四五 御助けの在處が違ふ

御世話敷い中を厭はずに、懈怠もなくよろこそ御參詣下さいました。此御世話敷い中を縁合せて御座へ出るのを、火の中こ

いで聞くといふので。ほんとの火の中ならこいで出らるゝ譯もなし、又ほんとの火が大千世界に満ちてをらう道理もない。此火と御譬なされたは、我々の胸の中に、世話敷い忙しいと起りごほしの煩惱のことで。煩惱の火ならば、大千世界何處まで行つても、間斷がないのである。拙者の門徒の蓮華庵、真信尼が、熱烈なる求道のあまり。逆も人交際をしてゐては、如實の念佛が稱へられぬから、山へでも入つて、本氣に念佛致さうと。京都高臺寺の山奥へ、人知れず小庵を結び、三年間念佛修行して見ても、確かな安心が出来ぬので、『靜なる深山のおくもなかりけり、も

このこゝろをつれてゆく身は』と一首の歌を残して、山から出て来た逸話があります。成程山は靜かでも、心はいつも騒がしい。其騒がしい心を連れて行くなれば、何處まで行つても靜かなことのある道理はない。淺間山の煙のたゝぬ日はあるとも、煩惱の煙のたゝぬ時はなし。其煩惱の煙に巻かれてゐては、法を聞くべき時はあるまいに。皆様今日世話敷い煩惱の火をこぎわけて、此座まで御出で下さつた上からは。無駄に此座を過さぬやう、聽聞に心を入れて戴きたい。

さて前席より引續いて御話し申す、四字尊號と六字尊號、鎮

西宗では彌陀の尊號を四字として南無の二字は衆生から持出す。頼み心といふのちやから彌陀と衆生と出合ひの六字である。淨土眞宗は彌陀の名號は四字なれども鎮西の如く南無の二字は衆生から出すに及ばぬ。四字其儘が生きて働く即是其行の御助けなれば。頼める由れがあつて餘る四字なるがゆゑに。四字即ち二字の南無阿彌陀佛で六字丸々が彌陀の名號と談ずることは委しく前席に御話しを致しました。是が平生業成と臨終業成の水際の分るところで。皆様は頼む一念のとき往生一定といふことを平素のやうに軽く聞いて御座らうが。是

は鎮西宗などには夢にも知らぬことで。鎮西宗では頼む一念どころかや、今日も頼み明日も頼み、今年も頼み來年も頼み、頼んで頼んで、死ぬまで頼み通しにしてゐても。頼んだところでは逆も往生は定まらぬのに。當流はあらう事かない事か、二度頼むのではない、三度頼むのではない、たつた頼む一念の短的といふ。電氣のつくよりまだ早い、手を拍て聲の出るよりまだ早い。早いも、頼む一念の極促に、往生一定御助け治定とは。どうした譯で斯る早手業に、無量永劫の大仕事が決まるのか。さあ皆様方此邊の所を、篤と味はふて見て下さい。不足

のない三度くの御馳走も慣れてしまへば小言が出る。時に
 は貧乏人の粗末の食事と並べて見るがよい不足どころか勿體
 ないと思はるゝ如く。鎮西宗では死ぬまで頼んで難儀しても、
 頼んだところでは往生は定まらぬ。いよ／＼往生の定まり場
 は臨終來迎といふて、身體から靈魂の抜出るとき、西方より親様
 が御迎ひに來て下されて。『汝佛名を稱するが故に諸罪消滅せ
 り、我れ來つて汝を迎ふ』。サア迎ひに來たぞと、御迎ひの佛に逢
 ふたとき、漸々往生一定と定まるのちや。夫ぢやから鎮西宗は、
 此臨終が至つて大事なので。心靜かに正念往生をせねばなら

ぬ。若臨終に妄想したり苦悶して、御來迎の親様に逢ふことが
 出來ぬときは。生涯頼んだ念佛も、丸で頼み損となつて仕まふ
 て、もとの地獄へ落ちねばならぬ、哀れ墓ない始末である。皆様
 や我々は此正念往生などが、仲々出來るものではない、多分は小
 便往生ぐらゐな、御粗末至極の臨終であらうのに。そこから定
 まる往生なら、迎も參る望みは叶ふまい。然るに難有いは淨土
 眞宗臨終まつことなし、來迎頼むことなし、死に場で定まる往生
 でない。『平生のとき、善知識のことばのしたに、歸命の一念發得
 せば、其時を以て娑婆のをはり臨終と思ふべし』。と仰せられて、

高座のもとの皆様が六字の手柄に夜があけて。是が親様御助けと頼まれた歸命の一念に、身體の命は終らすとも、迷ひの命は終りとなり。地獄一定のこのまゝで、往生一定の身となるが、一念發起平生業成の宗旨である。此宗旨の分れ目は、何處から違ふて來るかといへば。鎮西宗と眞宗では、大體において、御助けの在處が違ふので。鎮西宗の御助けは、淨土に御座る佛體ぢや。淨土眞宗の御助けは、此座に御座る名號ぢや。鎮西宗は佛體の御助けを知つて、名號の御助けを知らぬから、四字の名號に、自力頼みの二字を足し、南無阿彌陀佛の六字を以て、心存助給口稱南

無と淨土の佛を呼寄せる道具に六字を使ひたて。來て下されや阿彌陀様、どうぞと祈願請求の切ない頼みをするのぢやから。いくら頼んで見たとても、淨土の佛が臨終に、顔見せて下さるまでは、往生の定まらうやうはない。然るに淨土眞宗は、佛體の御助け其儘が、名號中に攝在せる、超世不共の御手柄を、深く聞かせて貰ふて見りや。淨土に御座る親様は、死ぬまで我等は逢はれねども。此座に届いた名號が、常來至此の御助け、四字で助かる御手柄が、其儘頼める南無の二字。二字即四字の御六字が、御助けの法であつたかと、聞信出來た一念に、頼まれたのぢや

助かつたのちや。此座で助けて貰ふて見りや、臨終待つことなし、來迎たのむことなし、死場の迎ひに用事はない。氣兼や遠慮で御迎ひ要らんといふのぢやない、今來て御座る攝取の親が六字ぢやもの、二度の迎ひはなんにする。正定不退も六字の働、必至滅度も六字の働。六字一つの働に腹のふくれたありなりが、信心決定の相ゆる。鎮西流の信心は、凡夫の心が體となる。一流安心の其體は、南無阿彌陀佛の六字の相と仰せられたは爰の味はひである。

四六 保つ所の佛智を募れ

さて此の如く、明ても暮ても六字一つの御話して持ちきりにして。信心も六字、安心も六字、御助けも六字、往生も六字、甚だしきに至りては、六字を生きた佛の親様のと申しますと。或同行が拙者を批難して、『松澤は佛體ざらひの六字募りぢや、丸で淨土の佛の足をあげて話してをる、彼は一種の法體募りに相違ない』と申してくれたさうな。成程六字を聞きもの稱へものにして、是は御恩報謝の薬味ぐらゐに思ひ。頼むといふは我

れがする助ける佛は淨土に御座る彌陀と衆生と差向ひになつて。往生の相談定めるやうに心得て頼みごゝろや安堵の仕ぶりに骨を折つて御座る同行では拙者の話しが腑に落ちん譯でもあらうが。拙者ちやとて佛體を嫌ふなどいふ譯が何處にありますか。逢ひたい見たいは山々でも煩惱に眼障られて逢ふことの出来ぬは仕方がない。此逢ふことの出来ぬ私へ逢ふてやりたいの親様は。四智三身十力四無畏の内證の功德光明相好説法利生の外相の功德。ツマリ智慧も功德も手も足も、名號六字に攝めこみ善知識の御取次より我等が耳へ届けて下

されてある萬行圓備の御六字を。是で足らぬと推拔て御座る御方が却りて佛の足をあげてをるのではなからうか。拙者を六字募りとは能くいふてくれた。八十通の御文も教行信證も六字の外に何かある。然らば祖師も蓮師も六字募り七高僧も御釋迦様一切の聖教有丈が六字募りの御仲間なら批難ぐらゐは御茶の子ぢや。全體阿彌陀如來が因願成就におしわたり重誓名聲の御入念六字で助ける本願を御建てなされたが基ぢやもの。六字の外に拙者ちやとて助かる種の御話しは、あるべき譯は更でないのぢや。

兎角世間の人々は、法の手強さを充分にいふて、此機の世話の更に不要い話しをすると、忽ち法體募りちやと批難をする人があるやうちやが。批難をする御自身は、或は機體募り、否意業募りて御座るのかも知れないのである。全體古來より、法體募りと嫌はれてをる異安心は。大事の御助けを我物にせずして、親様の御助けは間違ひないから、頼むも稱ふるも要るものかど。能機の信相を悉く拂ふて、此儘の御助けちやとすましてをるのを、法體募りと申すので。我輩の親は大金持である、親の身代有丈けは此身一人に譲り與へて下さるのちや。何程の借金が

あつたとして、心配もいらねば世話もいらぬ、どりきんでをるやうなもので。いかにも御尤もらしいことなれども。大事の身代が受取られてなかつたら、出掛けるときの汽車賃もないことである。法の手柄を募るのは、敢て悪くはなけれども、此機に受取りたものでなければ、往生の間に合ぬゆゑ、法體募りと嫌ふのちや。拙者が上來申すところの法體は、餘所や隣にあるものをいふのでない、口傳鈔の仰せの如く。『されば此善惡の機の上に、たもつところの彌陀の佛智を募りとせんより外は、凡夫いかでか往生の得分あるべきや』と此機の上に保つ所の佛智を飽まで

募るのであります。今日は試しに是を募りて御覽にいれますと能機の信相は忽ち揃ふてしましますから。サア御同行衆何など遠慮なしに尋ねて御覽なさい。『然らば御尋ね申しませう、往生一定の確かな信相は出来てありますか』答へて曰く、出来てをるとも、御聞き下さい皆様方。我機に問へば往生一定どころかや地獄一定の身なれども。今日此頃は一人暮しの身でないよ、宿りて御座る、何が御座る、南無阿彌陀佛の六字が御座る、是さへあれば往生一定御助け治定、動きのつかぬ信相は、確かに胸に溢れてある』。然らば次に御尋ね申さう。疑ひは晴れて

ありますか』。答へて曰く、晴れてをるとも、此機に問へば親子夫婦の中でさへ、疑ひだらけの身なれども。羨りがるなや今日此頃は、一人暮しの身ではない。御座る六字の顔見れば、間違はさぬの仰せぢやもの、是が親ぢやと頼まれた。此心の露塵は、ごも疑ひなければ、必ず極樂へ参りて、美しき佛とはなるべきなり』。『モ一つおまけに尋ねませう、雑行雑修自力を捨て、一心に彌陀が頼まれてありますか』。答へて曰く、あるとも、御聞きなさい、此機に問へば何んの仔細は解らねども、宿りて御座る御六字が。萬善萬行の總體で、逃ても逃がさぬ強力、御手に

かゝつてあるうへは。自力の出し場のないのみか、何が不足で
 餘行餘善に心の止むべき。善い悪いの世話もなく、唯ほれば
 れと頼まれて、絶りて任せて安堵して。あとの餘りが口へ出て、
 申す念佛の数々も、往生の用に足すのぢやない。唯嬉しさの思
 ひより、佛恩報謝の行業も。出来る此機がするのぢやない。出
 来ない筈の機の上に保つところの御六字の彌陀の佛智の働き
 で、心行共にうるはしく。相續出来る信相は、佛智を募る其外に、
 凡夫いかでか往生の得分などのあるべきや』と拙者は絶叫し
 たいところであります。

四七 鼠小僧の假諭

暑さの中を厭はず、善うこそ御參詣下さいました。斯る厳し
 い暑さの中に、田や畑で油の汗をながして、難儀してをる人々は、
 五十年か六十年の此世の利益に過ないのに。御集りの皆様方
 は、疊の上で無量永劫の大利益を、させて戴く此御座なれば。何
 卒暫らくのところは辛棒して、心静かに出離の大事を聴聞して
 下されたい。

さて上來説き去り説き來り、御話しを盡しました本願他力の

不思議の御手柄。造悪不善の我等凡夫が僅か六字の名號を聞
 信する一念に、正定不退の身の上となり。命終れば無上涅槃の
 御證を、開かせて戴くとは、心も語も斷果た、絶對不二の勝法は實
 に此南無阿彌陀佛の六字にして。此六字が我機の上に保たれ
 て見れば、我機たづねて信相を出さずとも。保つところの佛智
 不思議の働きて、自力も捨たり彌陀も頼まれ、安堵も決定も往生
 も、六字一つで不足はなかつたと、皆様も滿腹が出来ましたか。
 夫に付いて拙者は、日頃から思ひますには。全體阿彌陀如来が、
 我等を助けて下さるゝ、絶對他力の御手際は。まるで鼠小僧が、

泥棒をするやうな形ではあるまいか、と考へてをりますので。

大慈大悲の佛様を、泥棒などに譬へることは、誠に申譯のないこ
 となれども、絶對不思議の御手柄は、何に譬ふるものはない。い
 かにも鼠小僧のやうに、思はれて叶ひませんので。粗雜の言語
 は暫く耳を塞いでおいて下されて、兎も角も拙者の信仰の進
 るところを、一應は喋舌らせて下されたい。

昔鼠小僧といふ泥棒がありました、此奴至つて悪い泥棒で、尤
 も泥棒に善い泥棒のあらう譯はなけれども。此鼠小僧に限つ
 ては、分けて困りた泥棒でありました。其譯は、此小僧魔法を使

ふことが上手で、五尺餘りの大男が、戸締の嚴重にしてある人の家へ忍び込むことは容易でない。そこで彼は魔法を使ふて、忽ち二十日鼠といふ、小さい鼠になることを知つてをる。さあ二十日鼠に相を變れば、いかな家でも忍び込むことは容易ので、雨戸の節穴からでも這入られる。忍び込んだは、たつた一匹の鼠なれども、此鼠たゞの鼠にあらず、鼠小僧の化物なるが故に、猫に捕るゝ氣遣ひはない。猫に捕れぬばかりかや、此鼠に忍び込まれたら大騒動。家内中に貯へてある、金銀財寶残らず奪ひ去られてしまふ、サテモ諸人を困らせた泥棒が、鼠小僧であつたとい

ふ。今御警へ申すは甚だ勿體ないことなれども、阿彌陀如來が我等を助けて下さるゝ、絶對の御手柄が、いかにも是に似てをるので。阿彌陀如來は、五尺や一丈の佛でない、觀經の上から伺ふて見ても、六十萬億那由他恒河沙由旬といふ、廣大の御身體では、逆も煩惱具足の戸締り強い、我等が胸へ忍び込むことが出来ぬゆゑ。鼠小僧は魔法を使ふ、阿彌陀如來は佛法使ひの大奇術。佛法不思議の有丈けを御使ひなされ、六十萬億の御身體の、光明相好其儘に、相を變へて下されたが、南無阿彌陀佛の御名號。サア六字に化して下されては、いかなる五障の女人でも、五逆十惡の

戸締りたしかな凡夫でも。節穴よりもまだ小さい耳の穴からチヨロ／＼と貪嗔煩惱の腹底へ聞其名號の一念に。信心歡喜と忍び込むことが自由に出来る。忍び込んだはたつた六字の小鼠なれど此六字たゞの六字でない阿彌陀如來の化物なるが故に。三毒五欲の猫に捕るゝ氣遣ひはない猫に捕れぬ計りかや。此六字に忍び込まれたら大騒動我等が身代一時に奪ひ取られてしまふ。我等が身代とは何であるか無始より以來造りと造る惡業煩惱是ぞ我等が迷ひの身代。此身代に不足がなかつたればこそ地獄へ行くにも餓鬼になるにも費用に儉約はい

らぬので。三界二十五有界何處に迷はふと何時まで逗留してのよと自由自在であつた身が。聞かねばよかつたが聞いたが罰なんぼ聞いても聞こへた六字が生きた佛の化物でなかつたらこんな騒ぎにもなるまいに。無始より以來造り重ねた惡業煩惱の迷の財産一時に消滅と。我等が承知もせぬうちに、悉く奪ひ取られてしまふて見れば。困つたも弱つたも是非に及ばず迷ひ度うても沈み度うても其雜用が更になく。迷ふに迷はれず沈むに沈まれず何共斯共仕方の盡きた有様が正定不退の相である。

ソコデ鼠小僧と阿彌陀様善と惡とは大違ひ佛法と魔法と天地の別はあるけれど其手段方法に至つてはいかにも似てをる所がある。皆様も甚だ御聞き苦しうは御座らうがもう少し御話をさせて戴きたい。鼠小僧は困りた泥棒であつたかなれど阿彌陀様より餘程手緩い所がある。其譯は鼠小僧は人の家へ忍び込み諸有財産を奪ひ取つたは悪い奴なれども。取る丈取れば其晩の中に逃げて行つたから取られた家では困りたもの、今度は鼠も這入らぬやうに用心して、又も蓄財することも出来たが。阿彌陀如來も六字に化て、我等が心へ忍びこみ無始

より造りた罪過の迷ひの財産御取りなさるはよけれども。取るだけ取りたら鼠小僧の真似をして御抜け下さるればソリヤ又迷ふ工面もある。今後は寺へも參らぬやう可成六字に近寄らぬやうにして。年來仕慣た貪瞋煩惱で働けば一日か半日で落るぐらゐの雑作は直に出来ることなれども。なさけなや阿彌陀如來は鼠小僧と大違ひ、一度御宿りなされたら、モウ御拔なさらぬので。迷はふとするには困つたもので、我等が方には油断なく。今日は一日腹をたて憎や無念で日を暮し、地獄の業も可なり出来たと思ふあとから攝取して捨てざれば、阿彌陀と名

け奉る。是も彌陀が取りて仕まふぞと、取られて仕まへば仕
 方はない。今日は一日欲起し、欲しい惜いで難儀して、愚痴まで
 可なりこぼしたから。随分餓鬼や畜生の種が出来たと思ふあ
 とから、是も彌陀が受取るぞと、造るあとから取られて仕まひ。
 何程貪瞋煩惱で、稼ぎづめにして見ても、迷ひの身代たまつたも
 のに御座なく候。ド、のつまりは、稼ぐ私の心まで、六字の強
 力にからめとられて、思ひもかけぬ御浄土へ、参らにやならぬ仕
 末とは。往生一定御助け治定、何んど計らう道のない、絶対他力
 の味はひは、逆も盡せぬことであります。

四八 力なくして往生

偕皆様御聞取下されましたか、話しは不味が御手柄は甘い味
 ではありませんか。鬼や悪魔につまゝれてさへ、自分の力が叶
 はねば、泣く／＼乍ら任せにやならぬ、順はねばならぬのに。今
 は大悲の親様の、無上の方便力により、不思議の六字に攝め取ら
 れた身の上は。心おきなう絶りて任せて順ふて、安堵決定の信
 相は、たしかに南無阿彌陀佛の獨り働きと、喜ばるゝことであり
 ます。

然るに今此の如きの絶對不思議の御手柄で、參らにやならぬ身になつた、我身の實機を調べて見ると、此奴仲々の曲者で、『苦惱の舊里はすてがたく、未だ生れざる安養の淨土は戀しからず候』。ドナカといへば、極樂へ參るより、迷ふてゐたひが我等の性得、浮み出るより沈み込みたひが、此機の自性なるが故に。斯る六字に宿られては、落ちたひ地獄へも落ちられず、左程望みでもない御淨土へ、參らにやならぬは大變ぢや。何とかして生きた佛の化物の六字を追出す工面はあるまいかど。(皆様は喜び喜びの御相談に違ひはないが)。恐ろしいは此坊主、拙者の心中

を聞いて下さい、毎日佛を追出す算段にばかりかゝつてをります。ソコデ拙者共の地方では、何程氣強ひ食客でも、箒立てると逃げてゆく、拙者も佛の鼻先へ、箒を立てゝやらうかど考へ、草箒や竹箒では驚きたまはぬ佛様ぢやで。八萬四千の煩惱の箒を立て、朝から晩まで念佛一遍申しもせず、御恩一度び喜びもせず。煩惱の箒でドンチャン／＼と暮したから、佛様も居たまらずして、御抜け下されたであらうかど。夜の五更に我胸を、ソコツと覗ひて見たところが。此機なりやこそ護るその呼聲が、明かに宿りて御座る、サア大變ぢや、おれが心のどん底に、生きた佛

の化物が、未だに抜て下さらぬ。是では淨土へ參らにやならん、何んとか追出す工面はないかと考へて。今度は一つ思ひ切り、毒まぶせにしてやらうかと、拙者が佛にかけた毒は、モルヒ子や硝酸ぐらゐのものではない。三毒といふ大毒ぢや、是は佛には随分効能のある大毒で、諸佛や菩薩に此毒を少しでもつけやうものなら、千里も逃げて御仕まいなさるゝ毒故に。阿彌陀様にも能であらうが、併し効能が足らんと困るから、其三毒に五欲を程よく調合して。永の一日參詣恭敬も更にせず、三毒五欲で間隙もなく丸で佛の頭から毒まぶせに暮したから。佛も御抜け

下されたであらうよと、枕をつけて床の中、ソロリと胸をなでおろし、心の底を覗ひて見れば。間違はさぬの御六字が、確かに胸に残りて御座る。是は困つた手強い佛にも程がある、煩惱の箒立ても抜けたまはず、三毒五欲の毒をかけても動きたまはず。モ一此上は仕方がない、今度はいよく最後の手段、兵糧攻にし、て見よかど。居たか、在ませ阿彌陀様、御飯は差上げ申さぬぞ、と偈も淺間敷拙者の仕業。自分で喰る御飯なら、三度くは缺かしはせず、三度の外に彼是と、喰や飲には油斷のない拙者が。佛様には一日に、ただ一度の御佛飯、夫され忘れて上げずに仕ま

ふ、是こそ眞の兵糧攻め。時に世話しまぎれの御給仕は、立ちつ放しで佛の前に、御飯突出しソリヤ喰らへ、といはぬ計りの體たらく。こんな粗末の御給仕したら、假令氣強い佛でも、愛想つかして今度こそ、いよ／＼御抜け下されたであらうよ。懈怠に暮した其後で、心ひそかに腹の中覗いて見れば、こはいかに。其機のまゝで我れ頼め、必ず助くるの呼聲が、胸一杯に宿りて御座る。是には吃驚仰天し、最早や何共仕方はない、計らふことも逆らふことも手段も工夫も盡き果て。ア、往生ぢやア、往生と叫び出すより外はない。

皆様も世間に於て、彼人に往生したとか此話しに往生したといふことを、時々御聞きなさることがありませう。何なる場合に往生したといふものか、考へて御覽なさい。何共斯共手の盡きた所に出るのが往生といふ言葉でせう。此世の話しは二か八か片もつければ纏めも出来て、眞から底から往生した覺えのない拙者も。聞いて下され皆様方未來の問題ばかりには、ほんとに手強い阿彌陀様此度こそは實に往生させられてしまひました。モウ此上に、後へ残るは慚愧々々、勿體ないやら申譯ないやら。斯る絶對の御手柄を知らずして、惡魔にまさる此機をば、

白粉つけたり化粧して。親を盲人とだましこみ参るつもりが
 恥かしや、今は。「聴聞の化粧部屋海嘯に逢ふたこゝろなり」。〔重
 無釋の南〕丸の裸體でさらはれて、参らにやならぬ此身なら。永の
 後生は彌陀任せ、僅かな娑婆は油斷なく、邪見放逸にながれぬや
 う。表に出ては君國の爲め、内に入りては家族の爲め、都て報謝
 と心得て。命のあらん限りには、勇み勵みて勤めあげ、眞俗二諦
 の宗風を輝かせるは生涯の、我身の役と覺悟して。念佛相續を
 致しませう。

四九 聖人求道の徑路

前席に於て、法の絶對なる御手柄を、鼠小僧に譬へ、機の興盛な
 る有様は、毎日佛を追出しにかゝつてをるなど。思ひきつた
 御話しを致しましたので。皆様は餘りのことに驚いて、突飛の
 話にも程がある、と思召す御方もあり。又は甚だ不謹慎の説
 教である、大いに懲戒を加ふるがよい、と批難なざる御方もあら
 うが。併し信仰の進る所は仕方がない、多少の批難は受けね
 ばならん。拙者の批難ぐらゐは、どうでもよいが、近頃は困つた

もので。大事なく御法主臺下のことまで批難して、大谷派の安心が紊亂してゐるの。御法主の心靈治療遊ばしたのが、雜修になるのといひ立てゝをる。夫も他宗他教の人々がいふのであれば仕方はないが。多くは派内の末弟たる、而も肩書や責任のある人の口から出てをると來ては、實に涙が出るやうな次第である。全體法主臺下は借金、質草や、勸財の看板ではない、實に法の主、即ち安心の大權者であります。然るに末弟たるもの口より、一派の安心が紊亂してゐると申すのは、確かに御法主の大權の不行届きを表明することになるまいか。殊に人間

と人間が、智識と實驗とで考へ出した心靈治療が、なんで雜行雜修になりますか。若し心靈治療が雜行雜修ならば、電気治療も靜座療法も、皆雜行雜修とせねばなりません。今より七十餘年前のこと、初めて種痘の流行かけたころ、越中出町の金井老人が心配して、種痘が雜行雜修になるまいかと、手次寺まで尋ねて行った話がある如く。爰五六年も経ば、誰も怪しむことのない心靈治療も、初まりかけた今日のこと故に。雜行雜修になるまいかと、無智の輩の怪しむも無理はないことなれども。苟めにも法主臺下の遊ばすことを、末弟の分際として云云するやうな

ことでは。眞宗の最も重んずる師弟の關係は地に落ちて仕まふてをるかと思はれます。祖師聖人は「たとひ法然上人にかされ參らせて念佛して地獄におちたりとも更に後悔すべからず候ふ」と仰せられ、近江の琵琶湖を一人でかいほせといはれても、師匠の仰せには背かぬといふが眞宗信仰の立脚地であるゆゑに。善知識の遊ばすことは弟子たるものゝ絶對に服従するが就人立信の正意である、若御法主の遊ばすことが全く間違ひであると思ふたら泣いて膝下に跪つき御諫め申すことはよけれども公然批難などの出来るものではない。然るに

今日のやうな有様では支那や露西亞の革命の如く。やがて御法主を廢して仕まい宗意安心は多數決で定めることになりさうな。所謂危険思想が一派内にみち／＼てをらぬかと案せられ。夫が遂には國民道德の基礎を創付るやうにはなるまいかと杞憂してをる次第であります。斯る話しは御集まりの皆様には更に用事のない問題のやうではあるが。眞俗二諦の御流れ汲の御互は國民として天皇陛下の御尊嚴を飽まで忘却してはならぬと同時に。宗内にあつては善知識と頼む御方の威信は誓ふて損はぬやうに覺悟して戴きたい。勝手次第に知識

のよしあしをいひ振らして、何共思はぬやうな心懸では。僧俗共に眞實の信者とは決して申されません。

そこで祖師聖人の御信仰に於ては善知識の御言葉に絶對に服従なされたといふより外は更にないので。其御信仰たる絶對服従に至らせられた徑路を味はふて見ると、いかにも單純なので。親を尋ねて親に御遇ひなされたといふ、一言に結歸するのぢや。其親を尋ねなざるゝ動機となつたのは、いふまでもなく御幼少の時、御兩親に御別け遊ばされたのが原因であります『父なくんば何をか持まん、母なくんば何をか持まん』幾歲に

なつても親に別れては淋しいのに。僅か八歳の松若君と申上た祖師聖人夢見たやうに御兩親に御別れなされた心の内、淋しいやら哀しいやら、寢ても父様なつかしく、覺めても母上逢ひたやと、忘れたまふ隙はなかつた。其御心が九歳の春に一轉して、大きく御成遊ばしたのぢや。其譯は、今迄松若君の御懐しく思ひづめにして御座られた父母は、身體の親即ち五十年の親であつた。そこで若君つくづく思召すやうは、假令父上がましませばとて、母上が御座ればとて、千年萬年一所になつてをらるる譯はない。逢ふた初めがあつたもの、別れにやならぬは當りま

い。夢見たやうな五十年、僅か此世の中でさへ親がなければ淋してならん。出掛る未來は無量永劫、後生に親がなかつたら、何時まで泣いても果てしがつかぬ。所詮身體の親には逢ふことならぬ、もう此上は心の親、未來の親に御逢ひして、無量永劫助かりたやと思召し。明日とは待てぬ、今宵の中夜半に嵐の吹かぬものかとは、大急ぎに出家得度遊ばされた。

夫より比叡山二十年の御修行は、名利勝他のあらばこそ、一句の法を學びなさるゝにも、一事の行を御修し遊ばすにも。未來の助かる道はないか、心の親は御座らぬかと、一心不亂に尋ね盡

して御覽なされたが。智者や聖者の助かる道は數あれど、煩惱妄念の波風止まぬ此善信の心の親となりて下さるゝ御方に逢はれぬので、所詮我身の方では未來の親様に逢ふことならぬ、もう此上は神や佛に御頼みして逢はせて戴く外はないと思召し。二十九歳の春の頃、比叡山の山王七社を初めとし、彼方へ心願此方へ祈願。其信願祈願の最後の御苦勞が、六角堂へ百夜の御通ひでありました。皆様は百夜の御通ひといふことを、いつも聞き慣て御座るゆゑ、我々が一週間も御初夜參りを續けた位に、思ふてゐて下さるゝは困りますよ。口でこそ百夜とはいひ、

誰が數へても三月と十日です。夫程永い月日の中には雨やら風やら、目口もあかぬ夜も随分あつたに違ひない。今夜は風が悪く、一晩休まうと懈怠なされたこともなく。夫も五丁や十丁の道でない、山坂かけて三里十八丁は昔も今も同じこと。往復七里の御通ひに、連添伴は更になく、たゞの一人で丑の尅六角堂の真中へ、ジョンポリと御踞りなされた善信上人の心の内、南無大悲の觀世音、何卒善信の未來助かる法に逢はせて下されませ。南無大悲の如意輪觀音様、どうぞ善信の心の親に逢はせて下されと、一心こめての御祈願が、即ち百日の懇念で

あつたのぢや。皆様も御流汲の一分で御座るもの、祖師聖人の思召が、斯の通りと知れたなら。たとひ一座の御参りにも、法門義門は脇へぬけ、安堵したいの落付きたいのと、しやれた話しは後にして。差當り親に逢ひたい、御助けに逢ひたいといふ心懸で、御参り下されてはいかゞですか。其御助けに逢ふた一念が、南無と頼まれ、安堵の出来る時でせう。

そこで今日が百日の満願といふ夜明け方、「親あたり告を五更の孤枕に得て」と仰せられて、夢にも非ず、現にも非ず、ありありと善信上人の御前に、觀音様御立掛り遊ばされ、御告げなさる

仰せを聞けば、「善信房よ善信房、ようこそ参られた、ようこそ通はれた、眞實御身の心の親に逢ひたくば、比叡山を木の葉反しに尋ねても逢ふことならぬ。今は吉水の禪室に、法然上人といふ知識が御座る、其膝下へ詣つて聞かれよ行つて尋ねられよ、御身の親は待て御座るぞ、待て御座るぞ」と明かに御告げがあつたので。祖師聖人は數行の感涙にむせばせられ、早速比叡山へは離山狀を差出し傳手を求めて法然上人の禪室に臻り、出離の要道を御尋ねなされた。其時法然上人は善信上人に對はせられ。智者や賢者の助かる法は山々あれど、愚痴の法然や、無善

の御身極惡深重の衆生は、他の方便更になし、偏に彌陀を稱してぞ、淨土に生るとのべたまふ。往生之業念佛爲本は、源信和尚の御勸説、此法然も一切經を五遍まで繰返しては見たけれど、凡夫の助かる道がしれなんだ。哀しみ〜黒谷の經藏にいたり、歎き〜經卷を開き、何ぞ助かる法はないかと尋ねるうちに、善導大師の觀經の疏に。「一心專念彌陀名號、行住坐臥、不問時節、久近、念々不捨者、是名正定之業、順彼佛願故」とある所を讀んだ時。實に此御言が、魂にしみ、肝に銘じ、ア、名號六字で助けるは彌陀の本願の御約束。六字で助かるものならば、是が親様佛様。

三經の所説釋迦の金言諸佛の請合明かに信せられて見れば。六字の外に今は餘行餘善のありたけが更に用事のない事になりたぞと。宗の淵源を盡し教の理致を極めて御述下された。法然上人のたつた一座の御化導で。『たちどころに他力攝生の旨趣を受得し飽まで凡夫直入の眞心を決定しまじましけり』と善信上人バツタと打伏しア、迷ふたりく我も比叡山に居たときに此六字を知らんでなかつた聞かんでなかつた。聞いてゐる乍ら知つてゐる乍ら萬行隨一の六字と思ひ善本徳本の六字と思ひ兎角他人あしらひして來たは勿體なや。此御六字が抱

てかへて下さるゝ他力攝生の御手柄ある親様でありましたかど。二十年來尋ねつくして御座られた心の親に目出度御遇ひなされたが建仁元年吉水入室のときでありました。爰を祖師聖人の御自督より戴いて見ると。『親鸞におきては念佛して彌陀に助けられ參らすべしと善き人の仰せを蒙りて信する外に別の仔細なきなり』と仰せられた。是が即ち御師匠の絶對なる御言に服従遊ばし御助けに御遇ひなされ雜行を捨て、正行に歸し給ひたところである。

夫より以後の祖師聖人滿九十年までの御苦勞は。我身が遇

ふて安堵した、無量永劫の親様が、易行至極の南無阿彌陀佛にま
 しませば。此難有い御六字を、日本中の人々に、縁を求めて知ら
 せてやりたい、遇はせてやりたひの思召より外はない。依つて
 越後へ御流罪にならせられた其時に、祖師聖人の口づさみ給へ
 る御歌に、『彌陀の名をひろめんために、荒磯の越路を渡る波の
 うねうね』と仰せられ又七不思議の隨一の、鳥屋野の逆竹の御
 草庵の石碑に刻まれてある御歌に、『此里に親の死したる子は
 なきか、御法の風に靡く人なし』と仰せられて。此鳥屋野の里
 に親に別れた子はないか、身體の親に別れてさへ懐かしい思ひ

がたへまひに。増して心の親様が、御六字様であるぞよと道び
 く私の草庵へ、少しは詣つてよからうに。御法の風に靡かぬは、
 親を戀しふ思はぬか、と御歎きなされた御歌である。是から伺
 ふて見れば、祖師聖人の御一生御幼年の時より御臨終まで、彼尊
 の御胸に一縷貫徹と動かぬ信仰の徑路は。親を尋ねて親に遇
 ひ、其遇ふた親様を、人にも遇はせてやりたいとの思召しより外
 はないことは明瞭である。さて皆様よお聞き取が出來ました
 か、斯る祖師聖人の御手導きがあればこそ、末世に生れた我々が、
 疊の上にあるながら。なんの苦もなく六字の親に合せて戴き、

此世をかけて未來まで、安心安堵の身となつたも。偏に祖師善知識の御蔭と思ひ、海山の御恩一つは忘れぬやう、後念の勤めは勇み勇んで、芽出度ふ日送り致さねばならぬ次第である。

五〇 六字に満足せる實話

前席に於て祖師聖人御信仰の徑路に付いて、委しく御話しを致しましたが、御呑み込み下さいましたでせう。今日のお互が、信心の安心の頼むの絶るのといふことを、何んぞ六ヶ敷い仕事のやうに思ふてゐては、丸々方角の違ふた話しになるので。祖

師聖人も、信心や安心に難儀して御座られた間は、自分の力で後生の始末をつけやうとして、叡山二十年の御修行中、即ち自力時代のことであつたが。一度吉水の禪室に入らせられ、他力攝生の親に御遇ひなされ、名號不思議の御手が心に届いて見たれば。こちらで世話やく信心安心の用事はつきて、向ふより届いて下された。名號六字の御手が、信心となり安心となり、頼むも絶るも任せるも、面倒なしに調ふたは、心の親に御遇なされた時であつたから、御眞影の御讚にも、『觀佛本願力遇無空過者等』と淨土論の四句が銘記せられてある。此四句は祖師聖人の信仰

五〇 六字に満足せる實話

の肝腑とも申すべきものにして、殊に四句二十字の中に於て遇の一字が眞の眼目である。遇とはあふたこと、何に御遇ひなされたかといへば、御和讃に此御言葉を和げさせられ。『本願力にあひぬれば、むなくすぐる人ぞなき』と仰せられた。遇ひも逢ふも火事や地震に逢ふたぢやない、仇や敵に御逢ひなされたのではない。逃ても逃さぬ本願力の御助けに御逢ひなされた。其本願力の御助けが南無阿彌陀佛であつて見りや驚くまいぞといはれても、驚く思ひの起るのは、火事や地震に逢ふた證據。今は落さぬ本願力に御逢ひなされた證據には、頼むまいぞとい

はれても。頼まずにをられず、任せずにをられず、後生一つに不足のない身に御成遊ばしたのが。雜行を捨て、正行に歸したまひたる、聖人の御信仰であつたのぢや。

夫に付いて此聖人の御信仰と、全く其徑路を同じふしてをるかと思はるゝ、或少女の御話しを御紹介申して見ませうが。御判断は素より皆様の御自由として、暫く御参考までに聞いて下さい。夫は越後國で新潟の附近に大野といふ田舎町があります。此町には寺院がなく、説教場が立てられてあります。此説教場に毎年十二月二十二日より、報恩講が勤まるので。拙者は

十七年間も續いて、其報恩講の説教にゆきました。此説教場の創立當時より、全分の世話をし、代々同行頭をしてをる、高橋四郎平といふ呉服屋がある。當代の主人は中年の人ではあるが、佛法の事も町内のことも、裏表なく世話をする御方で。世間の人にも多く用ひられ、近年は遞信省から、大野郵便局長にまで選任せられ、家政も仲々の繁昌でありました。然るに、満つれば缺くるが世のならひといふものか、去る大正二年の秋、大事の御内儀が子供七人を殘して死んでしまはれたので、主人も非常に落膽してをられたが、其翌年には、四郎平其人まで死んでしまふた。

足掛け二年とはいふものゝ事實、一年もたつか經たないうちに、七人の子供が夢見たやうに、兩親を失ふてしまふた。サア此場合になつてくると、寧ろ二歳や三歳の幼子は、乳母や何ぞの手當をすれば、忽ち親を忘るゝ道もある。然るに其七人の中で、長女が當時十八歳で、花子といひ、次の娘が十六歳で、春子といふ。こゝら當りの年頃になつたものが、急に兩親に別れては。ほんたうに心の遣場がない、哀しいやら、淋しいやら、苦しいやら、切ないやら、寝ても起きても胸に煩悶と憂愁の絶えるひまがない。そこで其年の暮に、例年のとほり、拙者は説教にゆきましたところ、